

和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第21章）

外 蘭 幸 一

まえがき

本稿は前号（鹿児島国際大学『国際文化学部論集』第21巻1号）に掲載した和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第19~20章）に引き続くものである。「第19巻1号」（本シリーズ冒頭の号）所載の和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）（第1~3章）」の「まえがき」に記載したように、筆者は、すでにラリタヴィスタラ全27章の初訳を一応完了しているのであるが、もう少し読み易い和訳にすることを目標に「改訂版」を作成することにした。そして、これまでに第1章から第20章までを発表したので、今回はそれに続く形で、第21章を掲載する。なお、第15~21章は、拙著『ラリタヴィスタラの研究 中巻』の「第三部」に掲載したので、これらの章は『中巻』を底本とすることになる。

略号

方広 = 『方廣大莊嚴經』（大正新脩大藏經 187）. Chinese Translation of the Lalitavistara.

普曜 = 『普曜經』（大正新脩大藏經 186）. A Chinese Translation of the (old) Lalitavistara.

『佛教大辞典』 = 『望月 佛教大辞典（増訂版）』（昭和32年増訂版，世界聖典刊行協会）

『梵和大辞典』 = 荻原雲来編『漢訳対照 梵和大辞典』（昭和53年，講談社）

『佛教語大辞典』 = 中村元『佛教語大辞典』（昭和56年，東京書籍）

『上巻』 = 外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究 上巻』（平成6年，大東出版社）

『中巻』 = 外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究 中巻』（2019年，大東出版社）

BHSG = *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* Vol. I : Grammar, by F. Edgerton, New Haven, 1953.

BHSD = Ditto, Vol. II : Dictionary.

括弧符号の使い分け

和訳の文章中において用いる括弧は、原則として、次のように区別する。

1. 「 」は、会話文を示すために用いる。
 2. () は、直前の言葉を、別の言葉で言い換えるために用いる。
 3. [] は、訳文を補充して、意味をはっきりさせるために用いる。
 4. < > は、特殊な複合語や、重要な熟語を示すために用いる。
 5. 《 》は、東大主要写本に原文が欠落しているが、挿入すべきである部分の訳文に用いる。
 6. [] は、東大主要写本に原文が挿入されているが、削除すべきである部分の訳文に用いる。
 7. 【 】は、諸写本に混乱があり、削除すべきか挿入すべきか確定しがたい部分の訳文に用いる。
- *なお、第15章から第21章までの訳文の左端に付してある数字（40~446）は、『中巻』第二部（本文校訂）における梵語原文のページ数を示すものである。

キーワード：ラリタヴィスタラ，仏伝文学，大乘仏教，混淆梵語，仏教思想

『ラリタヴィスタラ』(大遊戯経)

第21章(降魔品)¹

328 かくの如く、実に比丘らよ、諸菩薩[摩訶薩]によって、これらの、かくの如き種類しやうごんの莊嚴が、菩薩(釈迦牟尼)のために、菩提道場に準備せられたり。また、菩薩(釈迦牟尼)は自ら、十方における、過去・未来・現在の諸仏陀世尊の一切の仏国土に存在する限りの、菩提道場の裝飾莊嚴そうしやくしやうごんの、それら全てを、その菩提道場けんげんに顕現せしめたり。

それからまた、比丘らよ、菩提道場に坐せる菩薩(釈迦牟尼)に、かくの如き思念が生じたり。「実に、マーラ(悪魔)はじゆん波旬は、この欲界の王・支配者・自在主なり。もしわれが、彼に知られることなくして無上正等覚を証得するならば、それはわれにふさわしからざるべし。さればいざ、われはマーラ(悪魔)波旬ちやうはつを挑発すべし。彼を降伏せしむれば、欲界てんじんとうの天神等の全てが降伏せらるべし。さらにまた、マーラ(悪魔)の眷属にして、かつて善根を種えたるも[今は]マーラ(悪魔)界に属する天子たちが、われによる獅子の[如き]遊戯神通ゆげじんずうを見て、無上正等覚に対する心おこを発すべし[と]。

かくして、実に比丘らよ、菩薩は、かくの如く思念したるのち、その時、眉間びやくの[白]毫相より、
330 「『一切の²』悪魔の領域を破壊する」(一切魔圈破壊)³と名づける、一つの光線はつを発したり。その光線によって、一切さんぜんだいせんの三千大千世界における、全てのマーラ(悪魔)の宮殿が照らされ[覆われ]て、鈍暗なるものと成り、また震動したり。また、この一切の三千大千世界が大光明によって遍照へんしやうせられたり。また、その光明の中から、《マーラ(悪魔)波旬は⁴》この、かくの如き種類しやうごんの声を聞けり。

1. 多劫たこうにおいて勤修こんしゆせる、極めて清浄なる衆生にして、
シュドーダナ王(浄飯王)の息子なる者は、王位を捨て、
かの利益者りやくしゃは、甘露かんろ(不死)を希求して出家し、
菩提樹の下に来たりて、今、奮励努力せり。
2. 彼は自ら[彼岸に]渡り、他者をして渡らしむべし。
また、彼は自ら解脱して、他者をも解脱せしむべし。
彼は[自ら]安息を得て、他者をも安息せしむべし。
また、[自ら]涅槃を得て、他者をも涅槃に導くべし。
3. [彼は]三悪趣さんあくしゆを、余すところなく、空無ならしむべし。
[善趣なる]天界と人間との都城を充滿ならしむべし。
かの利益者りやくしゃは[自ら]甘露かんろ(不死)を得たるのち、
至高の禅定・神通・甘露・安穩を施与すべし。
4. 自存者じそんしゃ(菩薩)が自ら法の雨を降らしめる時、
黒闇こくあんの親族よ、汝の都城を空無ならしむべし。

¹ 方広も「降魔品」と訳しているが、普曜には「召魔品」との章題が付されている

² 東大主要写本には「一切の」(sarva)が欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

³ この光線の名は、方広には「降伏魔怨」、普曜には「消魔宮場」と訳されている。

⁴ 東大主要写本には「マーラ(悪魔)波旬は」(māraḥ pāpiyaṇ)が欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

[汝は] 無力よりも無力なるものと成り、味方に加勢なく、軍勢は衰退し、どこに行くべきか、また何を為すべきかを汝は知らざるべし。

332 かくの如く、実に比丘らよ、マーラ（悪魔）波旬は、これらの挑発の偈によって刺激せられて、三十二相の夢を見たり。如何なる三十二相かと言え、すなわち、自分の宮殿が暗黒に覆われたるを見たり。自分の宮殿が塵埃に蔽われ、砂と砂利とに満たされたるを見たり。自分が恐れおののいて、あちこちに逃げまどえるを見たり。自分の頭冠が消失し、耳環が投げ捨てられたるを見たり。自分の唇と喉と口蓋が乾燥せるを見たり。自分の心臓に痛苦のあるを見たり。園林の葉・花・果実が萎れたるを見たり。諸の池が干上がり、水が消失せるを見たり。ハンサ（鶯鳥）・クローンチャ（帝釈鳴）・マユラ（孔雀）・カラヴィンカ（印度杜鵑）・クナーラ（好眼鳥）・ジーヴァンジーヴァカ（共命鳥）などの鳥群の翼が切り落とされたるを見たり。ペーリー（太鼓）・シャンカ（螺貝⁵）・ムリダンガ（小鼓）・パタハ（釜形太鼓）・ツナバ（一弦琵琶）・ヴィナー（琵琶）・ヴァツラキー（琵琶の一種）・ターダ（シンバル）・サンパ（シンバルの一種）《など⁶》の諸楽器が粉々に切断されて、地面に落ちたるを見たり。愛する親族たちですらマーラを見捨て、悲しげな顔をして⁷、一方に行き、沈思せるを見たり。第一妃たるマーリニー⁸が寝台から地面に落ちて、両《手⁹》で頭を悶え打てるを見たり。マーラの息子たちの中で《最も勇猛なる者たちと¹⁰》最も剛強なる者たちと最も威光ある者たちと最も智慧ある者たちの、彼らでさえも最も秀麗なる菩提道場に坐せる菩薩に敬礼を為せるを見たり。自分の娘たちが「《ああ、父さま。¹¹ ああ、父さま》と哀哭せるを見たり。自分の身体に汚れた衣服をまとえるを見たり。自分の頭が埃に蔽われ、青ざめて衰弱し、精気が奪われたるを見たり。涼房・重閣・円窓・塔門などが塵埃に蔽われて、崩壊せるを見たり。彼（マーラ）の軍將にして、夜叉・羅刹・鳩槃荼・乾闥婆の王たる者たち、彼らの全てが、手で頭を抱えて¹²、涕泣し慟哭しながら遁走せるを見たり。欲界諸天における天王たるところの者たち、すなわち持国天・増長天・広目天・多聞天・帝釈天・スヤーマ（夜摩天王）・サントウシタ（兜率天王）・スニルミタ（化樂天王）・ヴァシャヴァルティン（他化自在天王）などの、彼らの全てがマーラ（悪魔）波旬¹³を尊重することなく、菩薩の方を向けるを見たり。戦闘の最中に、彼（マーラ）の剣が鞘から抜けず、自ら不吉なる声を発したるを見たり。自分の家臣たちから自分が捨てられたるを見たり。吉祥なる満水の瓶¹⁴が戸口に落下せるを見たり。ナーラダ婆羅門¹⁵が不吉なる語を唱えるを見たり。門

⁵ 「螺貝」（saṅkha）とは「吹奏楽器の一種として用いられる法螺貝」である。

⁶ 「など」（adi）は東大主要写本に欠けているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

⁷ チベット訳は「顔に冷笑を浮かべて」という意味の訳文になっている。

⁸ 「マーリニー」の原語について、レフマン版は māriṇī と校訂しており、BHSD にもそれが採録されているが、ミトラ版と諸写本によれば māliṇī と読むべきであり、チベット訳 [phreñ ba can] によっても māliṇī が正しい読み方であると推察される。

⁹ 「手で」（paṇibhyām）は東大主要写本に欠けているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

¹⁰ 「最も勇猛なる者たちと」の原文は東大主要写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

¹¹ 「ああ、父さま」の原文は東大主要写本には1回だけ書かれているが、チベット訳によれば、2回繰り返すべきである。

¹² 「手で頭を抱えて」の部分のチベット訳は「杖に依りかかり」という意味の訳文になっている。

¹³ チベット訳には「波旬を」（pāpiyaṃsam）に当たる訳語が見当たらない。

¹⁴ 「中巻」には「満水の吉祥瓶」と訳したが、原文に合わせて「吉祥なる満水の瓶」に訂正する。チベット訳には単に「吉祥の瓶」（bkra śis kyi bum pa）と訳されており、「満水の」（pūrṇa）に当たる訳語はない。

¹⁵ nārada は「聖仙（Ṛṣi）の名で、彼はしばしば地上に下りて、天界に起りつつあることを告げ、また地上に起りつつあることを告げるために帰る」（『梵和大辞典』参照）という。この場面の方広には「那羅天」と訳されている。

336 衛のアーナンディタ¹⁶が不快なる語声^{ごせい}を発するを見たり。天空が暗黒に覆われたるを見たり。カーマ宮殿に住するシュリー¹⁷ [女神] が涕泣^{ていきゅう}せるを見たり。自分の権力が権威なきものとなれるを見たり。自分の味方^{みかた}が味方ならざるものになれるを見たり。宝珠や真珠の羅網^{らもう}が黒くなり¹⁸、粉々に切断されて地面¹⁹に落ちたるを見たり。一切のマーラの宮殿が震動^{しんどう}せるを見たり。樹木^{じゆ}が切られ、小尖塔^{しょうせんとう}が倒れたるを見たり。全てのマーラの軍隊が顔を背けて倒れたるを見たり。

かくして、実に比丘らよ、マーラ (悪魔) 波旬は、かくの如き三十二相の夢を見たり。彼は目覚めるや、恐怖し戦慄し懊惱して、一切の家眷を招集し、《彼ら²⁰》剛強なる者・親族・軍将・門衛たちが集合せるを知って、かくの如き偈を唱えたり。

5. かのナムチ (悪魔) は、それらの夢を見て苦惱し、

息子たちと、親族なるところの者たちと、

シンハハヌ²¹ (獅子類) と名づけるナムチの軍将とに呼びかけて、

黒闇の親族たる者 (マーラ) は、彼ら全てに問訊せり。

6. 昨夜²²、天空より²³偈による歌が聞こえたり。

「シャーキヤ族 (釈迦族) に生まれたる、身体^{そうごう}を相好に飾られたる者は、

六年間、過酷にして困難なる禁戒^{こんがい}を修習^{しゆじゅう}して、

菩提樹^{ぼだいじゆ}の下に赴けり。[汝は] 発奮精励^{はつぶんせいれい}せよ」 [との偈が]。

7. かの菩薩が、自ら悟りを得たならば、

幾多もの拘胝那由多の衆生を開悟せしむべし。

338

甘露 (不死) を会得^{えとく}して、清涼なる真実^{しやうりやう}に達したる時、

彼は、わが国土を余すところなく、空無^{くうむ}ならしむべし。

8. いざ²⁴、大軍勢^{ひき}を率いて出陣すべし。

樹王下に坐せる、かの、独りの沙門^{しやもん}を殺すべし。

四部兵衆^{しふびやうじゆ}²⁵を速やかに召集せよ。

われの好意を [得たいと] 願わば、躊躇^{ちゆうちよ}することなかれ。

9. 声聞^{しょうもん}や独覚^{どっかく}が世間に充滿しようとも、

[彼らが] 入滅すれば、わが軍勢は無力とならざるべし。

されど、彼ひとりでも勝者^{しょうしや}・法王 (仏陀) ^{ほうおう}に成るならば、

勝者の系譜^{けいず}は、計数^{けいすう}の域を超えて、決して断滅することなし。

¹⁶ anandita は「悦べる；幸福なる」の意であるが、ここではマーラの門衛の名として用いられている。方広には「歓喜神」と訳されている。

¹⁷ 「カーマ」(kāma) は「愛欲」の意、「シュリー」(śrī) は「吉祥」の意である。「吉祥天」は通常「福德を授ける女神」として有名である。方広には「護宮神」との訳語が見られる。

¹⁸ チベット訳には「黒くなり」(kṛṣṇibhūtāni) に当たる訳語はない。

¹⁹ チベット訳には「地面に」(bhūmau) に当たる訳語はない。

²⁰ 「彼ら」(tān) は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

²¹ simhahanu は「獅子の顎 (頰)」の意であり、「顎骨 (両頰) が豊かで獅子の如く勇壮なるさま (頰車如獅子相)」は「仏の三十二相の一つ」とされる (『佛教語大辞典』240頁参照)。

²² adya は通常「今日」の意であるが、ここではチベット訳 [mdaṅ sun] を参考に「昨夜」と訳す。

²³ 「中巻」には「虚空より」と訳したが、「天空より」に訂正する。

²⁴ 「いざ」(hanta) は、チベット訳には「そこに」(der ni) と訳されており、梵文と合わない。

²⁵ 「四部兵衆」とは「象兵、戦車兵、騎兵、歩兵」をいう。

²⁶その時、実に比丘らよ、サールトヴァーハ²⁷（商主）と名づける、マーラの息子がありて、彼は²⁸マーラ波旬に偈によって告げたり。

10. 父よ、何ゆえに悲しげな顔をして、顔色は青ざめたるや。

《貴方²⁹の》心臓は激しく脈動し、身体肢分は震えたり。

貴方は何を聞き、また、何を見たるや。速やかに述べたまえ。

[我らは] 正しく思量し、また、[正しく] 対策を講ずべきなり。

11. 矜持³⁰を失えるマーラは言えり。「息子よ、われの言葉を聞け。

われは、恐ろしきことこの上もなき、不吉なる夢を見たり。

340 今、この衆会³¹において、全てを余³²すところなく話すならば、

汝らは気絶して、大地に倒れ伏すべし。」

サールトヴァーハは言えり。

12. 戦闘のとき至らんとも、もし実に勝利するならば、罪過³³あることなく、

そこにおいて、もし敗北するならば。その者には罪過あるべし。

而して、貴方³⁴の夢の中に、かくの如き前兆ありとすれば、

断念するのが最良なり。戦闘において屈辱を受けることなかれ。

マーラは言えり。

13. 不動の決意を確立せる人は、戦闘において名声を得る。

もし堅忍不拔³⁵を所依として、よく為さば、われらが勝利すべし。

眷属衆³⁶を率いたるわれを見るならば、立ち上がって、

わが足元に頭を下げざる³⁷ことが、如何にして彼に可能ならんや。

サールトヴァーハは言えり。

14. 大勢の軍隊ありといえども、[その皆が] 極めて脆弱³⁸なりて、

剛強なる一人の勇者³⁹あらば、[一人のほうが] 戦闘に勝利すべし。

たとえ螢火⁴⁰が三千 [世界] に満ちるとも、

一つの太陽⁴¹に陰蔽せられて、光輝を失う [が如し]。

342 さらにまた、

15. 慢心⁴²と愚癡のみありて、思量なく、

賢者⁴³に逆らうところの、かような者は癒し難し。

かくの如く、実に比丘らよ、マーラ（悪魔）波旬は、サールトヴァーハの言葉を聞かずして、⁴⁴四部兵の大軍勢を召集せしめたり。[その軍勢は] 大勢力ありて戦闘を好み、見るも恐ろしく、身の毛がよだち、天神や人間たちによってかつて見聞せられたることなく、多様な顔の異形ありて、その変現の種類は百千拘胝那由多に及び、百千の蛇が手足にとぐろを巻いて絡みついた身体を有

²⁶ 方広には、この段落以下第15偈までの「サールトヴァーハ（商主）の諫言」の部分は欠けており、代わりに後出の「マーラの將軍による諫言」（第66偈～84偈）が挿入されている。普曜には「魔子の導師（サールトヴァーハ）による諫言」が長行（散文）で記載されている。

²⁷ sārthavāha は「隊商の長」の意であり、「商主」「導首」「導師」などと漢訳される。

²⁸ 「彼は」(sa) は、チベット訳には「かの [マーラに]」(de) と訳されており、梵文と合わない。

²⁹ 「貴方の」(te) は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

し³⁰、劍・弓・矢・槍・投槍・斧・三叉戟³¹・ブシュンディ³¹・棒・鞭³²・索繩³²・棍棒³²・円盤³²・金剛杵³³・カナヤ³⁴（一頭杵）[など]を持ち、豪華な甲冑を身に着け、頭・手足・眼が逆さまになり、頭・眼・顔から炎を出し、腹や手足の形が醜悪にして、猛火の顔を有し、極めて奇怪なる形相で歯を剥きだし、醜怪なる牙を剥きだし、多くの厚大なる舌が垂れ下がり、亀首か筵の如き [ざらざらの] 舌を持ち³⁵、火焰の如き [あるいは] 黒蛇の毒に満ちた [眼の] 如き赤い眼を有したり。《そこにおいて³⁶》ある者たちは毒蛇を吐けり。ある者たちは、ガルダ鳥（金翅鳥）が大海より掬い上げたが如く、毒蛇を掌に掴んで喰らえり。ある者たちは人の肉・血・手足・頭・肝臓³⁷・《腸³⁸》・糞などを喰らえり。ある者たちは、燃え立つ褐色・黒³⁹・青・赤・黄色の、恐るべき様々の姿をなせり。ある者たちは、朽ち果てた井戸の [如き] 眼⁴⁰・燃える眼・抜き出されたる [が如き] 眼・醜い斜視の眼を有し⁴¹、ある者たちは、醜悪なる眼が燃えながら回転せり。ある者たちは、燃える山を持ち上げて、得意げに、他の山まで登った後に帰来せり。ある者たちは、樹木を根こそぎ引き抜いて、菩薩のほうに向かって突進せり。ある者たちは、山羊の如き耳・箕の如き耳・象の如き耳・垂れ下がった耳・野猪の如き耳を有し、ある者たちは耳を有さざりき。ある者たちは、腹部のみが腫れ膨れて身体は瘦せこけ、多くの骨骸を現出せしめ、鼻は折れ曲がり、腹は壺の如く、足は頭蓋骨の如く、皮膚・肉・血は乾涸びて、耳・鼻・手足・眼・頭が切断せられたり。ある者たちは、血を飲むと欲して、互いに頭を切り落としたり。ある者たちは、きれぎれで調子はずれの、恐ろしく耳障りな声を出し、フンフンという音・ピチュという音⁴²・フルフルという音の叫声を発したり。[ある者たちは] 「この沙門ガウタマを樹もろともに、[攻撃せよ、⁴³] 連れ来たれ、連れ去れ、打ちのめせ、《打ち殺せ、⁴⁴》縛らえよ、捕らえよ、切れ、切り刻め、投げ捨てよ、放逐せよ」と言えり。ある者たちは、狐・野干⁴⁵・豚・驢馬・牛・象・馬・駱駝・驪馬・水牛・野兎・犛牛・犀・シャラバ⁴⁶（八脚獅子）の如き、さまざまの、身震いするほど恐ろしき醜悪なる顔貌を有したり。ある者たちは、

³⁰ チベット訳は「百千もの蛇に巻きつかれたる手足を有し」という意味の訳文になっている。

³¹ bhuṣuṅḍī は「武器（恐らく火器）の一種」であり、musuṅḍhi と呼ばれることもある。cf. Monier-Williams, *Sanskrit-English Dictionary*, pp.760 & 824.

³² cakra は通常「車輪」の意であるが、武器としては「円盤」の意となる。恐らく投擲用の武器である円盤は「ヴィシュヌ神の四つの持ち物（蓮華・螺貝・棍棒・円盤）の一つ」とされる。

³³ vajra は「雷電」の意であるが、雷神であるインドラ神の武器とされ「金剛杵」と呼ばれる。「堅固であらゆるものを打ち砕くので、金剛の名を冠している」（『佛教語大辞典』420頁参照）。

³⁴ kaṇaya は「槍の一種」（cf. BHSD）とされ、『梵和大辞典』には「一頭杵」との訳語例が挙げられている。

³⁵ チベット訳には「亀首」に当たる訳語はなく、「舌はざらざらの筵の如く」という意味の訳文になっている。

³⁶ 「そこにおいて」（tatra）は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

³⁷ チベット訳 [mkhal ma] によれば、「肝臓」（yakṛd）ではなく「腎臓」（vrkka）と読むべきであるが、写本の支持がない。

³⁸ 「腸」（antra）は、東大写本を含む多くの写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

³⁹ 「燃え立つ褐色・黒」の部分は、チベット訳では「青黒・茶（褐色）」という意味の訳文になっている。

⁴⁰ 「朽ち果てた井戸の [如き] 眼」の部分は、チベット訳では「変形した眼・井戸の如き眼」という意味の訳文になっている。

⁴¹ 「醜い斜視の眼を有し」の部分は、チベット訳では「くぼんだ眼をして醜く」という意味の訳文になっている。

⁴² 「フンフン」「ピチュ」という擬声語は、チベット訳では「フフ」「ピチ」と読める音訳になっている。

⁴³ 東大主要写本には「ある者たちは [言えり]、攻撃せよ」に当たる原文があるが、チベット訳にはそれに相当する訳語がないので、いずれも削除すべきである。

⁴⁴ 「打ち殺せ」（hanata）は、東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

⁴⁵ 「野干」は「野ぎつねのこと。狼の一種ともいう。夜に出歩いて人肉を食う」（『佛教語大辞典』1374頁参照）。

⁴⁶ śarabha は「鹿（の一種）」であり、ライオンや象の好敵手である「伝説的八足獣」とされる（『梵和大辞典』参照）。張怡蓀編『蔵漢大辞典』（1449頁；ldañ sko ska の項）には「八脚獅子」と訳されている。

獅子・虎・熊^{ヤチョ}・野猪⁴⁷・猿・豹・猫・山羊・羊・蛇・大黃鼠^{マングース}・魚・摩竭魚^{マカラ}⁴⁸・海豚^{いるか}・亀^{からす}・鳥^{はげわし}・梟^{ふくろう}・金翅鳥等の如き身体を有したり。ある者たちは奇怪なる姿をなせり。ある者たちは一頭を有し、[あるいは]二頭を有し、乃至、百頭を有したり。ある者たちは頭を有さざりき。ある者たちは一本の腕を有し、《乃至、百千本の腕を有したり。ある者たちは腕を有さざりき。⁴⁹》[ある者たちは上腕を有さざりき。⁵⁰]ある者たちは一本の足を有し、乃至、百千本の足を有したり。ある者たちは足を有さざりき。ある者たちは耳・口・鼻・眼・臍^{へそ}の孔^{あな}より毒蛇を出せり。ある者たちは、劍・弓矢・槍^{さんざ}・三叉戟^{さんさほこ}・斧^{チャクラ}・円盤^{コンコンシヨ}・投槍^{こんこうしよ}・カナヤ（一頭杵）^{ぼうさく}・金剛杵⁵¹等の種々なる武器を振り回し、踊りながら、菩薩を威嚇せり。ある者たちは、人の指を切って首飾りに編み、[それを]身に著けたり。ある者たちは、骨骸^{こつがい}や頭蓋骨^{ずがいこつ}を切断して⁵²首飾りの如きものを編み、[それを]身に著けたり。ある者たちは身体に毒蛇を巻きつけたり。ある者たちは、頭上^{かばん}に火盆⁵³を載せて、象・馬・駱駝・牛^{ろば}・驢馬^{ろば}・水牛[等]に乗り。ある者たちは頭を下に足を上に向け[倒立し]たり。ある者たちは⁵⁴針の如き身毛^{しんもう}を有したり。ある者たちは、牛・驢馬・野猪^{マングース}・山羊・羊・猫・猿・狼^{やかん}・野干の如き身毛を有し、毒蛇を吐き、鉄球を呑み込んで火を吐きつつ、焼けた銅・鉄の雨を降らせ、電光（稲妻）の雨を降り注ぎ、金剛の稲妻を放ち、熱い鉄砂の雨を降らせ、黒い雲を集めて風雨^{ふうう}⁵⁵を起し、矢の雲から[矢の]雨を降らせ、黑夜^{こくや}⁵⁶を現出せしめ、叫声^{きょうせい}を挙げながら菩薩に突進せり。ある者たちは、繩索^{じょうさく}を振り回し、大きな山を投げ落とし、大海を動乱せしめ、大山を跳び越え、山王メールを動揺せしめ[メール山に]突進し[あるいは]後退しては、身体肢分と各肢節を投げ散らし、身体を回転させ、大声で哄笑し、胸を[平手で]打ち⁵⁷、《胸を叩き、⁵⁸》髪^{かみ}の集積部⁵⁹（頭頂）を振り動かし、黄色の顔と青い身体とを有し、頭は燃え上がり、髪は上方に直立して、此処^{こかしこ}彼処^{こかしこ}にすばやく駆け回りつつ、狐狼の如き眼で菩薩を威嚇せり。また、老女たちが泣きながら菩薩に近づき来たりて、かくの如く言えり、「ああ息子よ、ああ、わが息子よ、起ちなさい。起って、すぐに逃げなさい」[と]。また、羅刹女の姿の者たち・ピシャーチー⁶⁰（食肉鬼女）の姿の者たち・盲目^{あしなえ}で跛^{あしなえ}で瘦せており飢餓によってやつれた表情の⁶¹餓鬼たちが、腕を上げ、

⁴⁷ 「熊・野猪」は、チベット訳では「野猪・熊」の順になっている。

⁴⁸ makara（摩竭魚）は「経典に出てくる巨大な魚の名で、空想上の魚らしい」（『佛教語大辞典』1278頁参照）。

⁴⁹ 《 》内の原文は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

⁵⁰ []内の原文（kecid abāhavaḥ）は東大主要写本にあるが、文脈上もチベット訳によっても不要である。

⁵¹ bhindipāla は詳細不明である。ここでは『梵和大辞典』の訳語例に従って「矛槩」と訳したが、パーリ語の bhindivāla は「槍（の一種）」であり、BHSD(bhindipāla)には「飛び道具の一種」と説明され、Monier-Williams, *Sanskrit-English Dictionary* (p.757)によれば「投げ槍か投げ矢、または投石器の一種」である。総合的に見て「手や弦を用いて投げる槍のような武器」と推察される。

⁵² チベット訳には「切断して」に当たる訳語が見当たらない。

⁵³ śakaṭikā は元來「子ども用玩具の小さな車」であるが、BHSD(śakaṭikā)によれば「石炭を入れる容器」の意である。この箇所⁵⁴のチベット訳は「燃えたる火盆」という意味の訳文になっている。「火盆」という訳語については張怡蓀編『藏漢大辞典』（2396頁：shugs liñ の項）を参照した。

⁵⁴ チベット訳には、この箇所⁵⁵の「ある者たちは」（kecid）が欠けており、「ある者たちは倒立して、針の如き身毛を有したり」という意味の訳文になっている。

⁵⁵ [中巻]には vātavṛṣṭi を、チベット訳に従って「風の雨」と訳したが、「風雨」（「風を伴った雨」の意）に訂正する。

⁵⁶ 「黑夜」（kāla-rātri）とは「世界が終わる破滅の夜」であり、『梵和大辞典』には「世界破滅の恐慌の夜」と説明されている。

⁵⁷ 「[平手で]打ち」（prasphoṭayantah）は「ばちばちと音を立てて打ちつける」の意である。

⁵⁸ 「胸を叩き」（urāṃsi tāḍayantah）は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

⁵⁹ 「髪^{かみ}の集積部」（keśāncid）は、チベット訳には「頭」（mgo）と訳されている。

⁶⁰ piśāci は piśāca の女性形である。piśāca については、第20巻第4号所載の拙訳（註181）を参照されたい。

⁶¹ チベット訳には「表情の」（ākhyā）に当たる訳語が見当たらない。

口を歪めて、泣きながら、恐怖の念を表し、脅かしつつ、菩薩の前に殺到せり。これら、かくの如き種類の、マール（悪魔）の軍勢の集合によって、周遍縦横八十由旬に至るまで充滿せられたり。〔その⁶²〕一人のマールのそれら〔の軍勢〕と同様なる、百拘胝もの三千〔世界〕⁶³に属するマール波旬たちの軍勢によって、水平方向も上方も充滿せられたり。

そこで、かくの如く言われる。

16. 夜叉・鳩槃荼・摩睺羅迦の姿の者たち、
 羅刹・餓鬼・ピシャーチャ（食肉鬼）の姿の者たち、
 350 世間に存在する限りの、醜く恐ろしき者たち、
 それらの全てが、幻術によって、そこに化現せられたり。

17⁶⁴. 一頭、二頭、三頭を有する者から、
 乃至、千頭を有する、多くの夜叉たち。
 一腕、二腕、三腕を有する者から、
 乃至、千腕を有するところの、多腕の者たち。
 一足、二足、三足を有する者から、
 乃至、千足を有するところの、他の多くの者たち。

18. 顔は青くして、身体が黄色なる者たち、
 また、顔は黄色にして、身体が青き者たち、
 《顔は白くして、身体が黒き者たち、
 また、顔は黒くして、身体が白き者たち、⁶⁵》
 顔が異形にして、また、身体が異形なる者たち、
 かくの如き、キンカラ⁶⁶（緊迦羅）の軍勢が来集せり。
 《⁶⁷虎・蛇・豚の顔を有し、
 象・馬・驢馬・駱駝の顔、
 猿・獅子・豺（ハイエナ）の顔を有する者、
 かくの如き顔を有する軍勢が来集せり。①
 辮髪を逆立てたる、恐ろしき多くの夜叉、

⁶² チベット訳には「その」(asya)に当たる訳語はないので、レフマン校訂本に従って削除すべきか。

⁶³ 「三千〔世界〕」は、チベット訳では「三千大千〔世界〕」という意味の訳文になっている。

⁶⁴ 本偈（第17偈）は6行から成るものと見なされる。

⁶⁵ 《 》内の訳文は、その原文が全写本に欠落しているが、チベット訳によって挿入した部分である。チベット訳された時点では存在していた原文が、その後の早い段階で欠落したために、いずれの写本にも伝わらなかったものと思われる。この直後に2行を挟んで、さらに6偈分の欠落があるが、これらも同じ経過で原文が失われたものであろう。これらの欠落偈頌の還梵作業については、拙稿「ラリタヴィスタラ『降魔品』における欠落偈頌の還梵について」（『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第18巻第4号、2018、317~333頁）を参照されたい。

⁶⁶ kimkara(kiṅkara)は「召使：従者」の意であるが、固有名詞としては「矜羯羅童子（こんがらどうじ）」と訳され「制吒迦童子と共に不動明王の脇侍として、その左側に侍す。不動明王五使者の一人。八大童子の一人。この名については、インド神話においてシヴァ神の侍者の中にも見出される」（中村元編著『図説佛教語大辞典』254頁参照）と説明される。普通名詞としては「羅刹（Rakṣasa）の一種」とされ、ここでは文脈上「夜叉や羅刹などのマール（悪魔）の従者たち」を総体的に指していると考えられる。なお、kimkaraはkaṅkara（極めて高い単位の数の名）と混同されることがあるので、注意すべきである。

⁶⁷ この後《 》内の6偈分は、上註65に記載したように、チベット訳による挿入部分である。4行の訳文ごとに後記した丸枠付きの数字は、チベット訳による偈の区分を示す番号である。

羊の頭・骨・でこぼこの瘤^{こぶ}を有し、
 身体は人間の血にまみれたる、
 かくの如き夜叉たちが、そこに来集せり。②

足は羚羊^{かもしか}の足の如く、
 瞳孔^{どうこう}は猿の眼に類似し、
 歯は象の牙齒^{がし}の如くなる、
 かくの如き顔の軍勢が、そこに来集せり。③

身体の形状は摩竭魚^{マカハラ}の如くにして、
 二つの瞳孔はめらめらと燃え、
 耳は山羊^{やぎ}の耳の如くなる、
 かくの如き顔の軍勢が、そこに来集せり。④

ある者たちは手に棍棒^{こんぼう}を持ち、
 槌^{つち}（ハンマー）・槍^{さん}・三叉戟^{さんさほこ}を手に持ち、
 ある者はメール山^{メール山}を手に持ち、
 見るも恐ろしき形相^{ぎょうそう}を有する夜叉が来集せり。⑤
 鋤^{すき}を持ち、円盤^{円盤}を持って、眼をぎよろつかせ、
 大なる山の峰を手に持って、
 風・石・雷電を激しく降らせつつ、
 見るも恐ろしき夜叉が来集せり。⑥》

19. 風が吹き起こり、雨が降り出し、
 百千^{ひゃくせん}の稲妻^{稲妻}が落ちたり。
 天には雷鳴がとどろき、樹木^{ようどう}は揺動^{ようどう}せり。⁶⁸
 [されど] 菩提樹^{菩提樹}の葉 [だけ] は揺れざりき。
20. 天は激しく雨を叩きつけ⁶⁹、風を吹きつけたり。
 激流が流れくんだり、水は大地^{はらん}に氾濫^{はんらん}せり。
 かくして、恐るべき夜陰^{やいん}が訪れ、
 その夜 [の恐怖] に、心識^{しんしき}なき樹木すら倒れたり。
21. それら、極めて恐るべき風貌^{ふうぼう}の、容貌醜怪^{しゅうかい}にして、
 奇奇^{きき}たる姿をなせる、全ての者を見たれども、
 榮譽^{きき}⁷⁰・功德・相好・威光を有する者（菩薩）の
 心は、メール山の如く、動揺せざりき。
22. 幻^{まぼろし}の如くにして、夢に似たるもの、また、
 叢雲^{むらくも}の如くなり、[一切⁷¹の] 法を觀じたり。
 かくの如く、法の理を熟考しつつ、

⁶⁸ この一行のチベット訳は「雷雲の音がとどろき、樹木は倒れたり」という意味の訳文になっている。

⁶⁹ チベット訳は「雨は激しく叩きつけ」という意味の訳文になっている。

⁷⁰ チベット訳には「榮譽」（śrī）に当たる訳語はない。

⁷¹ チベット訳には「一切の」に相当する訳語（kun）がある。

安穩なる禪定に入りて、[正] 法に住したり。

23. 「われは」「われの」と[のみ] 考えて、
有(存在)と身体における実在とに執著し、
愚昧にして謬見に住するところの、そのような者が見れば、
恐れを生じて、自性も迷乱すべし。
24. されど、釈迦[族]の息子(菩薩)は、自性に実体の無きこと、
[また] 諸法は縁によって起こることを覚知して、
《彼は⁷²虚空の如き心を、よく具足せるが故に、
軍勢を率いたる幻惑者(マール)を見るも、迷乱することなし。

かくして、実に比丘らよ、マール(悪魔)波旬に千子あり、そこにおいて、サールタヴァーハ(商
354 主)を初めとする、菩薩に浄信を生じたところのマールの息子たち、彼らはマールの右側に座を
占めたり。[逆に] マールに味方する者たち、彼らはマールの左側に座を占めたり。その時、マール
波旬は自分の息子なる彼らに呼びかけたり。「我らは何なる戦略を以て菩薩を攻撃すべきなら
んや」[と]。

そこにおいて、右側の、サールタヴァーハと名づけるマールの息子は、自分の⁷³父に偈によって
告げたり。

25. 眠りたる竜王を起こさんと欲し、
眠りたる象王を起こさんと欲し、
眠りたる獣王を起こさんと欲するところの、
その者[だけ]が安坐せる人王を起こさんと欲する。

左側にドゥルマティ⁷⁴(悪慧)と名づけるマールの息子ありて、彼はかくの如く言えり。

26. [われを]一見するのみにて[見た者の]心臓は破裂し、
世間における大樹の心髄もまた[破裂する]。
われの視線に打たれるならば、彼に生存する能力が如何にしてあらんや。
死に打たれたる生類の誰もが、かく[生存し得ざる定めで]あるが如く。

右側からマドゥラニルゴーシャ⁷⁵(妙音)と名づける者が言えり。

27. [汝は][われは]視るのみにて破碎す。[他に]何をか為さん」と言うも、
されど、いったい樹木に、また人間に如何なる心髄のあらんや。⁷⁶

356

たとえ汝が視線によってメール山を破碎しようとも、
彼(菩薩)の面前にては、汝の両眼は開くことすら為し得ざるべし。

さらにまた、

28. 大海を両腕を以て[泳ぎ]渡らんと欲し、また、その[大海の]水を吸い込み、

⁷² 「彼は」(so)は全写本に欠けているが、韻律上は挿入すべきである。

⁷³ チベット訳には「自分の」(sva)に当たる訳語がない。

⁷⁴ durmatiは「愚かな；悪意ある」の意。方広には「悪慧」、普曜には「悪目」と訳されている。

⁷⁵ madhuranirghoṣaは「美妙なる音声」の意。方広には「美音」、普曜には「軟音」と訳されている。

⁷⁶ 本偈(第27偈)の上二行のチベット訳は「一見するのみにて樹木も破碎すれば[当然]人間をも[破碎す]。われは奮励して何をか為さん、と[汝は]言うも、[それらの]心髄とはいはずこにありや」という意味の訳文になっている。

飲み尽くすことが、人間によって、よしんば可能であるとせよ、
 彼（菩薩）の無垢なる玉顔ぎよくがんを面前にて視ること、
 これは、かのことよりも、はるかに苦なりと、われは断言す。

左側からシャタバーフ⁷⁷（百腕）と名づける者が言えり。

29. わが、この身体には百本の腕があつて、
 一本〔の腕〕だけでも百本の矢を放つ。
 父よ、われは〔かの〕沙門しゃもんの身体を射抜くべし。
 貴方あなたは安心して、ためらうことなく出陣されたし。

右側からスブッディ⁷⁸（善智）〔と名づける者〕が言えり。

30. [汝に] 百本の腕があつて、いかに卓抜たくぼつならんとも、
 [たとえ] 身毛しんもうまでもが腕なに成らんとも、如何なる意味もなし。⁷⁹
 また、各々の腕に、[矢と] 同じく投槍なげやりがあろうとも、
 それらによって、彼（菩薩）に何事をも為し得ざるべし。

何故なぜならば、

358 31. 彼は、この世にて⁸⁰、世間を超えたる慈〔心の行〕ししじゆうを修習せり。
 慈〔心〕を有する、かの牟尼むにの身体をば、
 毒も剣も火も、よく害することなし。
 投げられたる諸もろもろの刀剣は⁸¹花はなに変ずる。

さらにまた、

32. 空界、地上、水中における、剛強こうきやうなる者たち、
 また、剣や斧きりぎりしを持てるグフヤカ⁸²（密迹力士）や人間たちも、
 忍辱にんにくりき力を有する、この人王にんおうの前に至るや、
 大力だいきありて威勢いせいよき〔はずの〕彼らはみな、微力ななるものと成る。

左側からウグラテージャス⁸³（猛威）〔と名づける者〕が言えり。

33. われは、彼の清浄なる身体の中に入って、焼尽しょうじんすべし。
 微細なるものから〔広がり〕空洞ある枯れた樹木を焼尽する山火事やまかじの如く。⁸⁴

右側からスネートラ⁸⁵（善眼）〔と名づける者〕が言えり。

⁷⁷ śatabāhu は「百の腕」の意。方広には「百臂」と訳されているが、普曜には「不浄」と訳されており、説く偈の内容も多少異なっている。

⁷⁸ subuddhi は「すぐれた理解力」の意。方広には「妙覺」、普曜には「善意」と訳されている。

⁷⁹ この一行のチベット訳は「身毛までもが何ゆえに腕にあらざるや」という意味の訳文になっている。

⁸⁰ チベット訳には「この世にて」(iha) に当たる訳語がない。

⁸¹ チベット訳は「刀剣は全て」という意味の訳文になっており、「全て」(thams cad) が挿入されている。

⁸² guhyaka は「半神半人の一種；kubera 神の財宝の番人」と説明され、「密迹天」と漢訳される（『梵和大辞典』参照）が、しばしば guhyakādhipati（密迹金剛；密迹力士）と同一視される。「密迹力士」については、第19巻第4号所載の拙訳（註74）を参照されたい。

⁸³ ugratejas は「猛烈な威力」の意。方広には「嚴威」、普曜には「強威」と訳されている。

⁸⁴ 『中巻』には、この一行を「山火事が、空洞のある枯れた樹木を、微小なるものまで（ことごとく）焼尽するが如く」と訳したが、誤訳と思われるので訂正する。なお、方広には「譬如山火焚枯木。一切叢林悉無餘（譬えば山火の枯木を焚くに、一切の叢林悉く餘無きが如く）」と訳され、チベット訳は「山火事の如く、微小なるものによって、芯髓を有する樹木をも枯らすべし」という意味の訳文になっている。

⁸⁵ sunetra は「美しい眼」の意。方広には「善目」、普曜には「善因」と訳されている。

34. たとえ汝がメール山の地中に入り得て、あるいは、
 [その山の] 全てを焼尽することができようとも、
 [また] 汝の如き者がガンジス河の砂の数ほどあろうとも、
 金剛こんこうの覚知を有する彼あた(菩薩)を焼くこと能わざるなり。

360 さらにまた、

35. 一切の山が震動しようとも、大海たいかいが涸渴こかつすることがあろうとも、
 月と太陽が地に落下しようとも、また、大地が溶けて無くなろうとも、
 36. 世間のために勤修こんしゆし、固き誓かたいを立てたる彼もと(菩薩)は、
 無上菩提むじょうぼだいを得ずしては、大樹たいじゆ(菩提樹)の下から起たざるべし。

左側からディールガバーフガルヴィタ⁸⁶(長腕自慢)[と名づける者]が言えり。

37. 貴方の、この宮殿に住しながら、われは[自分の]手によって、
 月や太陽、また、諸もろもろの星宿の宮殿の全てを粉碎ふんさいすべし。
 38. また、四大海しだいかい[のいずれ]からでも、われは、やすやすと水を汲む。
 父よ、[われは]かの沙門しゃもんを捕らえて、大海たいかいの彼方かなたに放擲ほうてきすべし。
 39. 父よ、この軍勢は残留せしめたまえ。貴方は憂愁うしゅうすることなかれ。
 かの菩提樹を引き抜き、[わが]手を以て十方じゅうじつに⁸⁷投げ捨てん。

右側からプラサーダブラティラブダ⁸⁸(浄心獲得)[と名づける者]が言えり。

40. 天神・阿修羅アスラ・乾闥婆ガンダルヴァの住める[宮殿]を、また、大海・山・大地を、
 もろともに、汝が驕り高ぶりて、[自分の]手を以て粉碎しようとも、
 41. 汝の如き者が千人あり、[あるいは]ガンジス河の砂の数ほどあろうとも、
 賢明なる、かの菩薩の、身毛すら動かし得ざるべし。

左側からバヤンカラ⁸⁹(生怖畏)[と名づける者]が言えり。

- 362 42. 軍勢あんごの中に安坐しながら、父よ、
 貴方あなたは、何ゆえに極度に恐れるや。
 彼に味方する軍勢は、どこにもなし⁹⁰。
 何を以て、貴方は、今、彼を恐れるや。

右側からエーカーグラマティ⁹¹(一意専心)[と名づける者]が言えり。

43. 世間において、月や太陽に群臣ぐんしんたるものはなし。
 転輪聖王てんりんじょうおうにも、また獅子にも[群臣はなし]。
 父よ、この菩薩に軍勢はなしといえども、

⁸⁶ dirghabāhugarvita は「長い腕を誇れる」の意。方広には「傲慢」、普曜には「所入變」と訳されている。チベット訳は「ディールガバーフが自慢して」という意味の訳文になっているが、BHSD によれば Dirghabāhur-garvita で「マーラの息子の名」である (cf. BHSG, §12.4)。

⁸⁷ 「十方に」(diśo daśaḥ) は、チベット訳には「彼方此方に」(phyogs phyogs) と訳されており、梵文と合わない。なお、方広には「擲十方(十方に擲つべし)」と訳されている。

⁸⁸ prasādapratilabdha は「浄心を獲得せる」の意。方広には「有信」と訳されているが、普曜には該当訳語が見当たらない。

⁸⁹ bhayaṃkara は「怖畏を生ぜしめる」の意。方広には「可怖」と訳されているが、普曜には該当訳語が見当たらない。

⁹⁰ 「どこにもなし」の部分のチベット訳は「いづくにありや」という意味の訳文になっている。

⁹¹ ekāgramati は「一つの対象に意識を集中せる」の意。方広には「一縁慧」と訳されているが、普曜には該当訳語が見当たらない。『中巻』には「(一尊慧)」と補訳したが、「(一意専心)」に訂正する。

[彼は] 独り^{ひと}でナムチ（悪魔）を能く^{よく}制圧せん。

左側からアヴァターラプレークシン⁹²（間隙伺求）[と名づける者]が言えり。

44. 槍も投槍⁹³もなく、棍棒もなく、劍もなく、

象も馬もなく、戦車もなく、歩兵もなく、

独りで坐せる、かの酩酊^{めいてい}せる⁹⁴沙門を、

われは今日殺すべし。父よ、いささかも取り乱すことなかれ。

右側からプニヤーランクリタ⁹⁵（福德莊嚴）[と名づける者]が言えり。

45. 彼は、那羅延⁹⁶の身体の如く切断しがたく破碎しがたき、

忍辱力の鎧^{にんにくりき}を著^{よろい}け、堅固^{けんこ}なる精進^{しょうじん}の劍を持ち、

三解脱^{さんげだつ}〔門〕〔空・無相・無願〕^{もんくうむそうむがん}を戦車とし、智慧を弓となせり。

父よ、彼は福德の力によってマーラ（悪魔）の軍勢に勝利せん。

左側からアニヴァルティン⁹⁷（不退）[と名づける者]が言えり。

46. 草を焼き焦^やがす山火事は退却^こすることなし。

また、練達^{れんたつ}者の放ちたる矢^{たいてん}は退転^{たいてん}することなし。

また、天空^{てんくう}より落ちたる雷^{らいでん}電^{たい}は退歩^{たいほ}することなし。

釈迦^{しゃあきや}〔族〕の息子^こを制圧^{せいあつ}せずしては、われは安坐^{あんざ}することなし。

右側からダルマカーマ⁹⁸（法愛）[と名づける者]が言えり。

47. 濡れたる草に遇^あわば、火も退却^{たいせつ}し、

岩山^{いわね}の峰^{みね}に当たれば、矢も退転^{たいてん}し、

雷^{らいでん}電^{たい}は大地^{だいち}に当たりて、そこから何処^{いずこ}に行かんや。

[されど] 彼（菩薩）は、寂滅^{じやくめつ}〔の甘露⁹⁹〕を得ずしては退転^{たいてん}することなし。

何の故にか。

48. 父よ、天空^{しよが}に書^か画^がを描^かくことはできようとも、[また]

存在^{そんざい}する一切衆生^{いっけしゆじやう}の心^{こころ}を一つに結合^{けつごう}することはできようとも、

また、月・太陽・風^{じようさく}を以^{もつ}て縛^{しば}ることはできようとも、

父よ、菩薩^{ぼさつ}を菩提^{ぼだい}の座^ざより動^{うご}かすことは不可能^{ふかうねい}なり。

366 左側からアンウパシャーンタ¹⁰⁰（不寂靜）[と名づける者]が言えり。

49. われは視線^{しせん}の猛毒^{まうどく}を以^{もつ}てメール山^{めいれん}をも焼^や尽^{じん}すべし。

諸^{もろもろ}の大海^{たいかい}の水^{みづ}をも、[われは]塵灰^{じんかい}となすべし。

父よ、今日、われは菩提^{ぼだい}〔樹〕と沙門^{さもん}（菩薩）とに相見^{あいみ}え¹⁰¹、

⁹² avatāraprekṣin は「隙をつけ狙う」の意。方広には「求悪」、普曜には「求便」と訳されている。

⁹³ 「投槍」(śūlā) に当たるチベット訳は「三叉戟」(rtse gsum) となっており、梵文と合わない。

⁹⁴ チベット訳には「酩酊せる」(saunḍa) に当たる訳語はない。

⁹⁵ puṇyālaṃkṛta は「福德に飾られた」の意。方広には「功德莊嚴」、普曜には「徳嚴」と訳されている。

⁹⁶ nārāyaṇa (那羅延) については、第20巻第3号所載の拙訳(註329)を参照されたい。

⁹⁷ anivartin は「撤退せざる」の意。方広には「不退」、普曜には「不還」と訳されている。

⁹⁸ dharmakāma は「法を愛する」の意。方広には「樂法」、普曜には「法樂」と訳されている。

⁹⁹ 諸写本、諸刊本に「甘露」(amṛta) が挿入されており、チベット訳にも「寂滅の甘露」と訳されているが、韻律上はこれを削除すべきである。

¹⁰⁰ anupaśānta は「寂靜ならざる」の意。方広には「不寂靜」、普曜には「澹怕」と訳されている。

¹⁰¹ 『中巻』には「想見え」と誤記したので、「相見え」に訂正する。

視るや否や、両方ともに、塵灰に帰せしむべし。¹⁰²

右側からシッダールタ¹⁰³ (目的成就) [と名づける者] が言えり。

50. たとえ、これら (メール山や大海) の全てが毒によって充滿し、

宏壯なる三千 [世界] が燃焼するに至らんとも、

功德藏なる者 (菩薩) が観るならば、ただちに、

毒は、全く無毒なるものと成るべし。

51. この三界における毒中の最悪なるものは、

貪欲と瞋恚と、また愚癡とであって、

それらは、彼 (菩薩) の身体にも、また心にも無し。

天空中に泥も塵垢も無きが如し。

52. 《[彼の] 身体も言語も心意も極めて清浄にして、

一切衆生に慈心を有すれば、

彼を武器や毒を以て害すること能わず。¹⁰⁴》

それ故、父よ、全軍を退却させたまえ。

368 左側からラティローラ¹⁰⁵ (楽戲) [と名づける者] が言えり。

53. われは、千の樂器を演奏する、

裝飾せる千拘胝ものアプサラス (天女) によって、

[彼に] 愛著を生ぜしめて、[魔の] 最妙なる城に牽き来たり、

正に愛欲に耽る者として、貴方の支配下に置くべし。

右側からダルマラティ¹⁰⁶ (法悦) [と名づける者] が言えり。

54. 彼 (菩薩) は、この世において、常に法樂¹⁰⁷を歡悦し、

禪定を楽しみ、甘露の利樂¹⁰⁸を喜び、

衆生を解脱せしめることと慈善とを愛樂す¹⁰⁹。

彼は愛欲の嬉戲¹¹⁰を享樂することなし。

左側からヴァータジャヴァ¹¹¹ (風疾) と名づける者が言えり。

55. われは、突進して、月・太陽を呑み込まん。

また、空中より強風を吹きつけて、

父よ、今宵こそ、沙門を引っ捕らえ。

¹⁰² 本偈の後半二行に当たるチベット訳は「われは、今日、これら両者を塵灰に帰すべく、父よ、菩提 [樹] と沙門とに相見えんと欲する」という意味の訳文になっている。

¹⁰³ siddhārtha は「目的 (あるいは利益) を成就した」の意。方広には「一切利成」、普曜には「一切吉」と訳されている。

¹⁰⁴ 《 》内の部分は全写本において原文が欠落しており、かなり早期に失われたものと思われるが、チベット訳には該当訳文が残っているので、それに基づいて訳出した。なお、Śantibhikṣu Śāstrī (*Lalitavistara*, Lucknow, 1984) はチベット訳をもとに復元した梵文を括弧をつけて提示している。

¹⁰⁵ ratilola は「快樂に浮つく」の意。方広には「喜著」、普曜には「樂貪」と訳されている。

¹⁰⁶ dharmarati は「法を悦ぶ」の意。方広には「法慧」、普曜には「法行」と訳されている。

¹⁰⁷ 「法樂」とは「法 (真理) に即した言動を楽しむこと」である。

¹⁰⁸ 「利樂」とは「利益と安樂」の意である。

¹⁰⁹ 「愛樂す」とは「愛し楽しむ」の意である。

¹¹⁰ 「嬉戲」とは「遊びたわむれること」である。

¹¹¹ vātajava は「風のように速疾なる」の意。方広には該当訳語が見当たらないが、普曜には「好伎」と訳されている。

一握りの¹¹²初殻^{もみがら}を風の〔吹き散らすか〕如く、吹き散らさん。

370 右側にアチャ【バ】ラマティ¹¹³（不動慧）と名づけるマーラの息子があり、《彼は¹¹⁴》かくの如く言えり。

56. 汝の突進^{いりよく}の威力が、そのように猛烈^{もうれつ}にして、
たとえ諸^{もろもろ}の天神・人間が、それと同様なるものと成り、
彼ら全てが一つに集結しようとも、
〔かの〕無垢なる人に害を加えること能わず。

左側からブラフママティ¹¹⁵（梵慧）と名づける者が言えり。

57. かくの如き猛烈なる者が、しかも多数あれば、
貴方^{あなた}の誇りを少しも傷つけることはあり得ず。
あらゆる目的は多数（群集）によってのみ成就せられる。
況して、彼はただ独りなれば、貴方に何をか為し得んや。

右側からシンハマティ¹¹⁶（獅子慧）〔と名づける者〕が言えり。

58. 地上に獅子の群居^{ぐんきよ}¹¹⁷はかつて存在せず、
視線に毒あるもの（蛇）もまた群居することなし。
威光ありて、真に勇猛なところの、
人中の牡牛（菩薩）もまた群居することなし。

左側からサルヴァチャンダーラ¹¹⁸（一切施陀羅）と名づける者が言えり。

59. 貴方の息子にして、勇猛と威勢と剛力とを具有せる者たちが、
声を挙げたところの、かくの如き憤激せる言葉を、
父よ、貴方は〔かつて〕聴聞したることなし¹¹⁹。
〔われらは〕速やかに、〔かの¹²⁰〕沙門を征伐しに行かん。

372 右側からシンハナーディン¹²¹（獅子吼）と名づける者が言えり。

60. 森林の中にて、多くの野干（ジャッカル）は、
獅子がいなければ、そこにて叫声を發する。
されど、恐るべき獅子の咆哮を聞かば、
恐懼して、彼方此方に逃走する。

61. 同じく、これらの、愚昧なる、マーラの息子たちも、

¹¹²チベット訳には「一握りの」(muṣṭim) に当たる訳語はない。

¹¹³写本 T3 によれば acapalamati であるが、acalamati とする写本が多い。どちらでも意味は同じく「不動なる意思」であるが、方広にも普曜にも該当訳語が見当たらない。

¹¹⁴「彼は」(sa) は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

¹¹⁵brahmamati は「梵天の意思」の意であるが、方広にも普曜にも該当訳語が見当たらない。

¹¹⁶siṃhamati は「獅子の意思」の意であるが、方広にも普曜にも該当訳語が見当たらない。

¹¹⁷「中巻」には「群住」と訳したが、「群居」に訂正する。

¹¹⁸sarvacāṇḍāla は「一切賤民」の意である。方広には「施陀羅」の訳語があるが、普曜には該当訳語が見当たらない。cāṇḍāla (施陀羅) とは「インドにおける四姓外の賤民。狩猟・屠殺・刑戮などを業とする。最も賤しく、カースト外の者とみなされた。彼らは蔑視、嫌悪され、人間とはみなされず、犬や豚と同類とみなされた」(『佛教語大辞典』838頁参照)。

¹¹⁹この部分のチベット訳は「父はかつて聞かれたるや」という意味の訳文になっている。

¹²⁰チベット訳には「かの」に当たる訳語 (de) がある。

¹²¹siṃhanādin は「獅子の咆哮」の意である。方広にも普曜にも「獅子吼」と訳されている。

最勝なる人（菩薩）の言葉を聞かざる、
 その間は、彼らは大胆に出まかせを述べるも、
 人中の獅子（菩薩）が咆哮を發するや、逃走する。

左側からドシュチンティタチンティン¹²²（悪思念）〔と名づける者〕が言えり。

62. われの思念したること、それは、即刻、この世に実現する。

〔しかるに〕彼は、何ゆえに、この軍隊を見ざるや。
 速やかに起ちあがりて遁走せざるがゆえに、
 彼は愚蒙なるか、もしくは、便法を知らざる者なり。

右側からスチンティタールタ¹²³（善思利財）と名づける者が言えり。

63. 彼は愚蒙にあらず、〔便法を知らざる者にあらず¹²⁴〕勇なきにあらずして、

汝らこそ愚蒙にして、自制することなき者なり。

汝らは彼の剛勇を知らざるなり。

彼の智慧力によって、〔汝らは〕みな制圧せらるべし。

374 64. マーラの息子たちがガンジス河の砂の数ほどありて、

その剛勇において〔みな〕汝らの如き〔猛者〕ならんとも、

彼（菩薩）の身毛の一本をだに動かすこと能わず。

況して、〔彼を〕殺害せんとの考えは、さら〔に不可能〕なり。

65. 汝らは、彼に対して、害意を持つことなかれ。

尊重心を持ち、清浄なる信心を生ずべし。

彼は三界における王となるがゆえに、

戦闘を為すことなく、退却すべきなり。

略説すれば、かくの如く、彼ら、満千名のマーラの息子たちはみな、清白の部と黒闇の部とに分かれて、マーラ波旬に、それぞれ偈を以て告げたり。

その時、バドラセーナ¹²⁵（賢軍）と名づける、マーラ波旬の將軍があり、彼はマーラ波旬に対して偈を以て告げたり。

66. 貴公の従者たる帝釈・護世王・緊那羅の群集と、また、

阿修羅王やガルダ（金翅鳥）王たちが、合掌をして、彼（菩薩）を礼拝せり。

67. 況して、〔貴公の〕従者たらざる梵天や遍光天¹²⁶の天子たち、また、

浄居天の天神たちの、彼ら全てが彼を礼拝せるは言うまでもなし。

376 68. 貴公の息子たちのうち、これら、智慧あり剛力ありて聡明なる者たち、

彼らは、菩薩に対して心から随順し、帰命頂礼せり。

¹²² duścintitacintin は「悪しき思考を念ずる」の意である。方広には「悪思」、普曜には「念悪」と訳されている。

¹²³ sucintitārtha は「利益（または目的）を善く思念せる」の意である。方広には「善思」と訳されているが、普曜には該当訳語が見当たらない。

¹²⁴〔 〕内の原文 (na avidhijña) は、東大主要写本には挿入されているが、チベット訳には相当訳文がない。

¹²⁵ bhadrasena は「賢善なる軍隊」の意。この將軍の唱える偈は、方広では「マーラの息子たちによる偈」の前に置かれているが、「魔王の主兵大臣、波旬を諫めて、偈を説く」とされ、個人名はない。普曜には「賢天」と訳されている。

¹²⁶「遍光天」(ābhāsvara) は「光音天」とも訳され、色界第二禪の第三階に配置される。この天については、第19巻第2号の拙訳（註140）を参照されたい。

69. 八十由旬に亘って充滿せる、夜叉をはじめとする、このマーラの軍勢もまた、
みな、過失なき者（菩薩）を視て、大部分は、清浄なる信心を有したり。¹²⁷
70. 暴悪かつ醜怪にして、おぞましき、これらの凄絶なる軍勢を見ても、
驚愕することなく畏縮することもなし。彼は、今日、必ずや勝利を得ん。
71. この軍勢が陣を構えたる、その場処にて、梟や狐狼が叫声を挙げ、
また、烏や驢馬が鳴けるが故に、即刻、退却するが適切なり。
72. 菩提の座を御覧あれ。パタクンター¹²⁸・ハンサ（鶯鳥）・コーキラ（郭公）・
マユーラ（孔雀）たちが右繞を為せるが故に、彼は、今日、必ず勝利を得ん。
73. この軍勢が陣を構えたる、《その場処には¹²⁹》煙煤や砂塵の雨が降り、
大地の中心（菩提の座）には花の雨が降るが故に、[わが¹³⁰] 忠告に従って退却されたし。
74. この軍勢が陣を構えたる場処は、凸凹にして、棘に覆われたるに、
菩提の座は明浄なる黄金なれば、聡明なる者たちは退却するが宜しかるべし。
75. もし退却せざれば、かつて見たりし[汝の]夢は現実となるべし。仙人たちによって
諸国が[灰へと¹³¹]損壊されたるが如く、[菩薩は、この¹³²]軍勢を灰燼に帰せしめん。
76. かの¹³³高貴なる仙人たりしジャナ王¹³⁴がブラフマダッタ¹³⁵によって激怒せしめられ、
[その時]ダンダカ¹³⁶の森は焼尽せられ、多年に亘り、草も生えざりき。
- 378 77. 一切世間における、禁戒を修習し苦行に専心せる、あらゆる仙人たち、
彼らの中で、この人は最勝者にして、実に、一切の生類に害を為さず。
78. 貴公はかつて聞かざりしや。「身体に美しき相好の輝ける者があり、
しかも、出家するならば、その者は煩惱を滅除して、仏陀に成る」と。
79. 諸仏子¹³⁷によって、供養のために、これら、かくの如き光嚴が化作せられたり。
それ故に必ずや、最勝衆生（釈迦菩薩）は最上なる献供を受領すべし。

¹²⁷ この偈全体のチベット訳は「八十由旬に亘って充滿せる、夜叉等の、このマーラの軍勢は、大部分が清浄なる心を以て、
みな過失なき者を視たり」という意味の訳文になっている。

¹²⁸ paṭakuntāは不明であり、レフマン版にはpaṭukroñcāと校訂されている。ここではチベット訳 [pa ta kun ta] を参考に「パ
タクンター」で一つの鳥名とみる。cf. BHSD.paṭa(3)。

¹²⁹ 「その場処には」(tatra) は東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

¹³⁰ チベット訳には「わが」に当たる訳語 (bdag gi) がある。

¹³¹ 「灰へと」(bhasmam) は諸写本に挿入されているが、韻律的には余分であり、チベット訳によっても不要である。

¹³² チベット訳には「この」に当たる訳語 (ḥdi) がある。

¹³³ チベット訳には「かの」(sa) に当たる訳語はない。

¹³⁴ 「ジャナ王」(rājā jano) については、諸写本に混乱が見られはっきりしない。janaは「人民」の意であるが、チベット訳
[rgyal po ḥgro ba] によれば、「Jana [という名の] 王」を意味すると考えられる。方広の「羅闍大仙」という訳語は
rājā (王) を人名と見做したものと考えられるが、普曜の「濫衍化人」(『大正大藏經』第三卷518下) という訳語は意義
不明である。

¹³⁵ brahmadatta は古譚に頻出する人名であり、「梵与 [王]」「梵施 [王]」などと訳されるが、この場面の方広には「浄徳」
と訳されている。

¹³⁶ ダンダカ (danḍaka) は、叙事詩『ラーマヤナ』でラーマ王子が活躍する舞台として知られる有名な森の名である。「か
つては繁栄した地方であったダンダカの森、カーリングの森、メーリヤの森、マータンガの森は、いずれも仙人の怒り
によって滅亡した」という伝承は、仏典(中阿含經56「優波離經」;「唯識二十論」(河出書房『世界の大思想Ⅱ-2 仏典』
287頁); 中村元・早鳥鏡正訳『ミリンダ王の問い2』(東洋文庫15, 44頁) 等参照) にも記載されている著名なものであ
るが、その物語の詳細や登場人物等を確認できる資料は、寡聞にして未見である。

¹³⁷ 「仏子」(jinasuta) とは、この場合「仏陀の愛弟子たる菩薩」「仏陀を慕い、成仏を目指す菩薩」を意味する。

80. [彼の¹³⁸] 明浄なる眉間 [白] 毫が拘胝那由多 [もの多く] の国土を照らし、
それにより我らは覆蔽せられたるが故に、[彼が¹³⁹] マーラ軍を降伏¹⁴⁰するは必定なり。
81. 世界¹⁴¹の頂上に住する天神たちですら、彼の頭頂を視ること能わざるが故に、
必ずや、他者によって説かれたることなき、一切智性¹⁴²を獲得したまわん。
82. メール山や鉄圍山、また、月天・日天¹⁴³・帝釈天・梵天や、
諸の樹木や高壮なる山の、全てが菩提の座に敬礼を為せるが故に、
83. 福德力あり、智慧力を有し、《また正智力を有し、¹⁴⁴忍辱力と
精進力とを有する彼は、ナムチ(魔)の朋党を無力なるものとなすこと必定なり。
84. 象が焼かれざる(生の)土器を、また、獅子が狐狼を摧破するかの如く、あるいは、
太陽が螢火を[制圧するか]の如く、善逝(釈迦菩薩)は[魔]の軍勢を摧破せん。

かくの如き[將軍の]言葉を聴き、別の、マーラの息子が烈しく怒り、眼を真っ赤にさせて言えり。

- 380 85. 汝は、かの、孤独なる、独りの者への讃辞を、
甚だしくも際限なく述べたてたるも、
独りだけで、いったい何を為し得ようか。
恐るべき大軍勢を[汝は]何ゆえ視ざるや。

その時、右側からマーラプラマルダカ¹⁴⁵(魔摧伏)と名づける、マーラの息子が言えり。

86. 世間において、太陽や月、また、
獅子や転輪聖王に、味方は必要にあらず。
菩提[樹下]に坐して、決意せる、
菩薩もまた、味方を必要とせざるなり。

その時、菩薩は、マーラの勢力を減退せしめるために、満開の百葉蓮華¹⁴⁶の如き顔を振り動かせり¹⁴⁷。それを見て、マーラは、「わが軍勢は菩薩の口の中に入れり」と考えて、逃走せり。逃走したれども、《「何ごとにもあらず」とて¹⁴⁸》再び戻り来たりて、眷属とともに、色々な種類の武器を、

¹³⁸ チベット訳には「彼の」に相当する訳語 (hdi yi) がある。

¹³⁹ チベット訳には「彼が」に相当する訳語 (des) がある。

¹⁴⁰ 「降伏(ごうぶく)」とは「威力をもって打ち負かすこと；制圧すること」である。

¹⁴¹ 「中巻」には「存在(世界)」と訳したが、「世界」に訂正する。

¹⁴² 「一切智性」(sarvajñatva) とは「すべてを知る智慧の状態」である(『佛教語大辞典』60頁参照)。

¹⁴³ 「中巻」には「月・太陽」と訳したが、「月天・日天」に訂正する。

¹⁴⁴ 《 》内の原文は、東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。なお、「智慧力」(prajñā-bala) と「正智力」(jñāna-bala) との相違は必ずしも明瞭ではないが、「智慧力」は判断力や洞察力を、「正智力」は理解力や記憶力を意味するものと考えられる。

¹⁴⁵ mārapramardaka は「マーラを粉碎する」の意。方広にも普曜にも該当訳語は見当たらない。

¹⁴⁶ śatapattra は「百の羽毛または葉を有する」の意であり、鳥としては「きつつき」あるいは「孔雀」を、植物としては「日中に咲く紅蓮華」を指す。ここでは「百葉蓮華」と訳した。

¹⁴⁷ チベット訳では「満開の百葉蓮華の如き顔を振り動かせり」の部分が、本段落の最後尾に位置する部分に移動している。チベット訳者の間違いか、板刻上の誤りと思われる。

¹⁴⁸ 《 》内の部分の原文は全写本に欠落しているが、チベット訳 [ci yañ ma yin no sñam nas] によれば、これを挿入すべ

また、須弥山^{しゅみせん}ほどもある山々を、菩薩の上に^{とうか}投下したり。しかし、それら、菩薩の上に投下せられたるものは、花の《天蓋^{てんがい}や¹⁴⁹》宮殿の形に^{けんどく}変じたり。また、見毒のある蛇¹⁵⁰・猛毒のある蛇^{きどく}・気毒のある蛇¹⁵¹たちが^{かえん}火焰を放出したれども、その火の輪は菩薩の^{こうりん}光輪の如きものに形を変じたり。

382 その時、再び、菩薩は右手で頭を撫でたり。すると、「菩薩の手に劍あり」と《マールは見て¹⁵²》、南方に逃走せり。[されど]「何ごとにもあらず」とて、再び戻り来たり。戻り来て、また、菩薩の上に様々な種類の武器を、[すなわち]非常に恐るべき劍・弓矢・槍・投槍・斧・ブシュン¹⁵³・ムシャラ¹⁵⁴（^{ついでぼう}槌棒）・カナヤ（^{いっとうしよ}一頭杵）・ガダー（^{こんぼう}棍棒）¹⁵⁵・円盤・ムドガラ（^{えんぱん}金槌）¹⁵⁶・樹木・石^{じょうさく}・繩索^{てつきょう}・鉄球を投げたり。されど、それらは、投下されるや否や、色々な種類の¹⁵⁷花の^{ようらく}瓔珞や花の天蓋【の如きもの¹⁵⁸】に形を変じたり。また、^{はなふぶき}花吹雪に^{はなわ}変じて大地にも降り注ぎ、^{かづら}花環の鬘となつて菩提樹を装飾したり。また、菩薩の、これらの偉大なる莊嚴を見て、マール波旬は^{しつと}嫉妬と^{せんぼう}羨望に《¹⁵⁹気分を》害されて、菩薩に言えり。「いざ、王子よ、起て、起ち上がれ。王権を享受せよ。汝の福徳は[わずか]それしきなり。どうして汝が^{げだつ}解脱を得ることができようか」[と]。

その時、菩薩は、^{けんこ}堅固・^{じんじん}甚深・^{こうだい}高大・^{にゅうわ}柔和・^{びみょう}美妙なる^{おんじょう}音声を以て、マール波旬に、かくの如く言えり。「波旬よ、汝は、^{むしやせえ}わずか一度の無遮施会¹⁶⁰によって、欲[界]の支配権を得るに至れり。されど、われは幾百千拘^こ胝^{てい}尼^に由^ゆ多^たもの¹⁶¹祭式を無遮施会として設けたり。また、[自分の]手・足・眼・頭などを[切り取り¹⁶¹]切り取つては、^{もろもろ}乞う者たちに与えたり。諸の衆生を解脱せしめるために、
384 住居・財物・穀物・^{がく}臥具・^{きょうぎょうしよ}衣類・^{えんりん}經行處・園林などを、幾度となく、乞う者たちに与えたり」[と]。

すると、その時、マール波旬は菩薩に偈を以て返答したり。

87. 往昔、^{おうしやく}儂が、^{むしやせ}申し分のなき、^{むしやせ}無遮施の

祭式を設けたることは、今ここに、汝が証人なり。

されど、汝の証人は、ここに、^お誰も居らざれば、

[汝の]^{ぜいげん}贅言に何の利やあらん。汝は打ち負かされたり。

菩薩は言えり。「波旬よ、この大地がわれの証人なり」と。

その時、菩薩は、マールとマールの^{けんぞく}眷属とを、^{はじめ}慈と悲とを首とする心によって^{おほ}覆い尽くして、獅子の如く、恐れず、驚かず、狼狽せず、臆病ならず、畏縮せず、動揺せず、混乱せず、^{きょうく}恐懼も^{しんもう}身毛

きである。

¹⁴⁹「天蓋」(vitāna) は、東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

¹⁵⁰「見毒のある蛇」(dṛṣṭi-ṣiṣa) とは「まなざしで人を毒する蛇」である。

¹⁵¹「気毒のある蛇」(śvāsa-ṣiṣa) とは「有毒な息を吐く蛇」である。

¹⁵²《 》内の部分の原文は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

¹⁵³bhuṣuṇḍi については、上註31を参照されたい。

¹⁵⁴muṣāla(= musala) は「杵；棍棒；金棒」の意であり、「槌棒」と漢訳されることがある。

¹⁵⁵gadā も「棍棒状の武器」である。

¹⁵⁶mudgara も「槌状の武器」であり、「金槌」と漢訳されることがある。

¹⁵⁷チベット訳には「色々な種類の」(nānāvīdhāni) に当たる訳語がない。

¹⁵⁸幾つかの写本には「如きもの」(iva) が挿入されているが、挿入していない写本が多数である。

¹⁵⁹「気分を」(cetā) は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

¹⁶⁰「無遮施会」とは「国王が施主となり、国内の誰にでも供養し布施する大きな祭り」「万民に開放された布施の祭式」であり、「無遮会」とも呼ばれる。

¹⁶¹「切り取り」(nikṛtya) は、東大主要写本においては繰り返されているが、チベット訳によればこれを反復する必要はないので、削除すべきかと思われる。

堅¹⁶²もなく、掌には螺貝・旗・魚・瓶・卍字・勾鈎 (L型)・輻輪 (車輪の輻) の相を有し、[指間は¹⁶³ 網蓋によって結び合わされ、美しく輝く銅色の爪に飾られ、繊細・柔軟にして極めて優美なる、無数の劫における無量なる¹⁶⁴ 善根資糧の蓄積によって成就せられたる [端嚴なる] 右手を以て、全身を撫でたるのちに、悠然として大地を打てり。また、その時、次の偈を述べたり。

88. この大地は、一切の生類の住處なり。

動くものにも動かざるものにも平等にして、差別なし。

386 これがわれの証人にして、われに偽りあることなし。

今ここに、汝 (大地) は、わがために証言をなせ。

菩薩 (釈迦牟尼) [の手] が触れるや否や、この大地は六種に震動し、烈しく震動し、あまねく震動したり。鳴響し、激しく鳴響し、あまねく鳴響したり。あたかも、マガダ国の銅製の器物が材木によって打たれて¹⁶⁵ 音を発し、反響する¹⁶⁶ が如く、まさにその如くに、この大地は菩薩の手によって打たれて音を発し、反響したり。

すると、その時、この三千大千世界にスターヴァラー¹⁶⁷ (堅住) と名づける【大¹⁶⁸】地の女神ありて、彼女は、百拘胝もの地女神の眷属衆を伴い、全大地を震動させて、菩薩からさほど遠からざるところに、地面を破って半身を現出し、あらゆる装身具に身を飾り、菩薩に向かって敬礼し合掌して、菩薩にかくの如く言えり。「それ、その通りなり。大丈夫¹⁶⁹ よ。それ、その如くなり。貴方の述べたるが如くなり。私たちは、それを¹⁷⁰ 現前に視たり。それどころか、世尊よ、貴方自らが、天界を含む [全] 世界の最高の証人たるものにして、権証 (判断基準) たるものなり¹⁷¹」 [と¹⁷²]。かくの如く言って、大地の女神¹⁷³ スターヴァラーは、マーラ (悪魔) 波旬を色々な方法で非難し¹⁷⁴、また、菩薩を【讚美し¹⁷⁵】称赞して、さらに自分の力を様々に示現したるのち、まさに、そこに隠没せり。

388 89. その大地の声を聞くや、かの¹⁷⁶ 幻惑者 (マーラ) は、軍勢もろともに、
恐懼し、気が動転して、みな遁走したり。

¹⁶² 「身毛堅」とは「[恐怖心や極度の興奮などによって] 身の毛のよだつこと」である。

¹⁶³ チベット訳には「指間は」に相当する訳語 (sor moñi bar) がある。

¹⁶⁴ 「無数の劫における無量なる」の部分は、チベット訳では「無量の劫における」という意味の訳文になっている。

¹⁶⁵ チベット訳には「材木によって打たれて」(kāṣṭhenābhyāhatā) に相当する訳語がない。

¹⁶⁶ 「反響する」は、チベット訳では「永く反響する」という意味の訳文になっている。

¹⁶⁷ sthāvarā は「不動の；安定した」の意であるが、方広にも普曜にも該当訳語が見当たらない。

¹⁶⁸ チベット訳には「大」(mahā) に当たる訳語がなく、写本 T3 にも欠けているので、削除すべきかもしれない。

¹⁶⁹ 「大丈夫」とは「偉大な人物」の意である。

¹⁷⁰ 「中巻」には atra を「これを」と訳したが、文意を勘案して「それを」に訂正する。

¹⁷¹ 「権証 (判断基準) たるものなり」(pramāṇabhūta) に関する論文として、袴谷憲昭「pramāṇa-bhūta と kumāra-bhūta の語義」(『駒澤短期大学佛教論集』第6号所収) があり、それによれば bhūta は「真実の」の意であるという。その指摘に従って、これを「真実の基準なり」と訳すことも可であるが、ここではチベット訳 [tshad mar gyur pa dam pa lags so] (権証たるもの最上者なり) を重視して訳した。「権証」とは「権威ある証言；間違いのない判断基準」の意である。

¹⁷² 「〜と」(iti) は全写本に欠けているが、レフマン校訂本には挿入されている。

¹⁷³ チベット訳には「大地の女神」に相当する訳語がない。

¹⁷⁴ 「非難し」(nirbhatsya) は、チベット訳では「口実 (つけいる隙) を消失せしめ」という意味の訳文になっている。nirbhats(= nirbharts; cf. BHSD.nirbhatsayati) には「あざける；嘲笑する」の意味もある。

¹⁷⁵ チベット訳によれば「讚美し」(abhyarcya) は削除すべきである。

¹⁷⁶ チベット訳には「かの」(sa) に当たる訳語はない。

森の中にて、獅子の咆哮を聞きたる野干の如く、
 [また] 鳥が、土塊を投げるや否や、たちまち飛び去るが如く。

かくして、実に、マール（悪魔）波旬は苦悩し、落胆し、憂愁して、慚愧に耐えぬ形相をしなが
 らも、慢心に囚われたるが故に、去ることなく、再び戻り来たることなく、逃亡することもなく、
 後方を向いて【立ち¹⁷⁷】、さらにまた軍勢に呼びかけたり。「諸君は、共に集まりて、もうしばらく
 待たれよ。今から、われらは、この者を、もしや貪愛によって起たしめうるか否かを検証すべし。
 まことに、かくの如き衆生宝¹⁷⁸を、即座に壊滅することなかれ」と。

それから、実に、マール波旬は自分の娘たちに告げたり。「娘らよ、汝らは行って、菩提の座に
 近づき、菩薩を試査¹⁷⁹せよ。愛欲を有するや、あるいは愛欲なきや。愚癡ありや、あるいは智慧あり
 や。盲昧なる者なりや、あるいは、諸方を明知せる者なりや、あるいは、究竟の依処なき者なり
 や。怯懦なる者なりや、それとも堅固なる者なりやを」と。この言葉を聞いて、かのアプサラス
 （姦女）たちは、《菩提道場へ、¹⁸⁰》また、菩薩のところへと近づき来たりて、菩薩の前に立ち、三十
 二種の〈婦女の媚惑〉を示現したり。三十二種とは如何なるものか。すなわち、次の如し。ある女
 たちは、そこにおいて¹⁸¹、顔の半分を覆い隠したり。ある女たちは、引き締まり盛り上がりたる乳
 390 房を見せたり。ある女たちは、微笑して歯並を見せたり。ある女たちは、腕を上げ伸びをして腋下
 を見せたり。ある女たちは、ビンバ果の如く〔く赤¹⁸²〕き唇を見せたり。ある女たちは、半分閉じた
 眼で菩薩を見つめ、見ては、またすぐに閉じたり。ある女たちは、半ば覆われた乳房を見せたり。
 ある女たちは、衣服をゆるめ垂らして、腰帯¹⁸³を巻ける臀部を見せたり。ある女たちは、ドゥクー
 ラ¹⁸⁴製の薄衣をまとい、腰帯¹⁸⁵を巻ける臀部を見せたり。ある女たちは、足環でリンリンという音
 を立てたり。ある女たちは、乳房の間から一連の首飾りを見せたり。ある女たちは、半ばまで開け
 たる股を見せたり。ある女たちは、頭や肩の上にパトラグプタ¹⁸⁶（護羽鳥）やシュカ（鸚鵡）や
 シャーリカー（鳩鶴）《が止まりたる¹⁸⁷》を見せたり。ある女たちは、菩薩を流し目によって視たり。
 ある女たちは、美しき衣裳を着けながら醜く装えるが如くに振る舞えり。ある女たちは、臀部と腰
 392 帯¹⁸⁸とを振り動かせり。ある女たちは、とまどえるが如き姿をつくりて艶かしく此処彼処に歩き廻
 れり。ある女たちは、舞い踊れり。ある女たちは、歌をうたえり。ある女たちは、戯れては、また、
 羞恥してみせたり¹⁸⁹。ある女たちは、風に揺り動かされたるカダリー¹⁹⁰（芭蕉樹）の如く腿を揺り動

¹⁷⁷ チベット訳には「立ち」(sthitvā) に当たる訳語がないから、これは削除すべきかもしれない。

¹⁷⁸ 「衆生宝」(sattvaratna) とは「衆生中の宝；立派な衆生」の意である。

¹⁷⁹ 「試査」とは「調べて確かめること」である。

¹⁸⁰ 「菩提道場へ」(bodhimaṇḍo yena) は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

¹⁸¹ 「ある女たちは、そこにおいて」の部分、チベット訳では「彼女たちの中の、ある者は」という意味の訳文になっている。

¹⁸² チベット訳には「赤き」に相当する訳語 (dmar bahi) がある。

¹⁸³ 「腰帯」のチベット訳は「金の腰帯」という意味の訳文になっている。

¹⁸⁴ dukūla は「ある植物の名」であり、「その植物の内皮から作られた美麗なる布」の呼称でもある。

¹⁸⁵ 上註183に同じ。

¹⁸⁶ patragupta は pakṣagupta と呼ばれ、「羽毛に護られた」の意で「護羽鳥」と漢訳される。

¹⁸⁷ 「止まりたる」(upaviṣṭān) は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

¹⁸⁸ 上註183に同じ。

¹⁸⁹ 「羞恥してみせたり」の部分のチベット訳は「羞恥せるが如き振りをなせり」という意味の訳文になっている。

¹⁹⁰ kadali は kadala の女性形で「芭蕉」と訳される。バナナと同種の植物であり、腐りやすく破れやすいので「脆弱さ」や「はかなさ」の表徴とされる。

かせり。ある女たちは、幽艶なる声を洩らせり。ある女たちは、薄絹を着て鈴をつけた金の腰帯を巻き、戯笑しながら歩き廻れり。ある女たちは、衣服や装身具を地面に脱ぎ捨てたり¹⁹¹。ある女たちは、隠れたると露わなるとの装身具の全てを顕示せり。ある女たちは、香を塗った腕を見せたり。ある女たちは、頬に塗油して耳環を見せたり。ある女たちは、身体¹⁹²を覆い隠し顔を覆いながら、時々ちらっと「顔を」見せたり。ある女たちは、初めに笑いざわめき嬉々として戯れ遊び、互いに思い出話をしては、再び恥ずかしげに黙坐せり。ある女たちは、少女の姿や未出産の女の姿や中年の女の姿を示現したり。ある女たちは、愛欲を帯びて菩薩を招きたり。ある女たちは、花吹雪を菩薩に注ぎかけて、また、「菩薩の¹⁹³」前に立って菩薩の心境を考量し、さらに顔を凝視したり。「この人は欲に染まった感官を以て視るや、それとも両眼ともに遠方を視るや、[眼は]動くや、あるいは動かざるや」と。「しかし」彼女らは¹⁹⁴、菩薩の顔が清浄無垢にして、ラーフ¹⁹⁵より解き放たれた月の光輪の如く、昇り来たれる旭日の如く、黄金の祭柱¹⁹⁶の如く、千の花弁の満開せる蓮華の如く、供物に注がれた火焰の如く、不動なることメール山の如く、超然たること鉄圍山の如くにして、感官をよく護持すること象の如く、心は極めて温順なるを見たり。

その時、それらマーラの娘たちは、さらにいっそう¹⁹⁷菩薩を魅惑せんがために、¹⁹⁸かくの如き偈を唱えたり。

- 394 90. 最高の季節なる、うるわしき春が訪れたる時、
満開の花咲く樹の下で、私たちは恋愛を娛しむ。
貴方の容貌は端正にして、非常に美しきが故に、
相好に彩られた者よ、[貴方の]欲するがままになるべし¹⁹⁹。
91. 私たちは、高貴なる生まれにして、容貌うるわしく、
私たちは、天神・人間の安楽の因を生ずる。
速やかに起ち上がって、青春を享樂したまえ。
菩提は得難きが故に、心を転向せられたし。
92. 貴方のために身支度し、盛装して来たりたる、
これらの、美しく着飾りたる天女たちを、しばらく²⁰⁰御覧あれ。
この姿を視て、愛欲への執著ある者の、誰が魅惑せられざるべし。
たとえ、枯木の如く、余命少なき者ならんとも。
93. 髪はしなやかにして、かぐわしき甘き香りあり。
頭冠や耳環や飾り葉をつけて満開の「花の如き」顔を有し、
額は優美なりて、顔には綺麗に化粧をなせり。

¹⁹¹「脱ぎ捨てたり」の部分のチベット訳は「脱ぎ捨て、恥ずかしげに、再び拾い上げたり」という意味の訳文になっている。

¹⁹²「身体」(kāyā)に当たるチベット訳は「頭」(mgo)となっており、梵文と合わない。

¹⁹³チベット訳には「菩薩の」に当たる訳語がある。

¹⁹⁴チベット訳には「彼女らは」(tah)に当たる訳語はなく、「～と見たれども」という意味の訳文になっている。

¹⁹⁵rāhuは「日蝕や月蝕を起こすとされる阿修羅の名」である。

¹⁹⁶「祭柱」(yūpa)とは「供犠祭式において犠牲獣をつなぐ柱」である。

¹⁹⁷「さらにいっそう」の部分は、チベット訳には単に「強く」と訳されている。

¹⁹⁸チベット訳では、この箇所「歌と踊りをまじえたる」という意味の訳文が挿入されている。

¹⁹⁹チベット訳は「[貴方に]従うものと、私たちはなるべし」という意味の訳文になっている。

²⁰⁰チベット訳には「しばらく」(täva)に当たる訳語はない。

- 眼は、清浄なる²⁰¹蓮華の如く、大きくて愛らしきなり。
94. 顔容は満月の如くにして、
 熟したビンバ果の如き〔赤き〕唇を有し、
 396 螺貝・クンダ花²⁰²・雪の如く白い歯を有したる、
 愛楽²⁰³を求める、魅力にあふれた女たちを御覧あれ。
95. 乳房は、よくひきしまり、ふくよかに盛り上がり、
 腹部の三条の襷は非常に優美なりて、
 臀部は、寺廟を囲む周円道の如く、豊満にして愛らしき、
 この上もなく美しき姦女〔たち〕を、御主人さまは御覧あれ。
96. 象の鼻の如き〔丸い〕股を有し、
 腕には腕環を隙間なく嵌めて、
 胸部は豪華な黄金の帯で艶やかに飾りたる、
 この、貴方の側女〔たち〕を、御主人さまは御覧あれ。
97. 〔私たちは〕ハンサ（鶯鳥）の歩調で緩る緩ると歩き、
 甘美かつ優雅に、深く情愛をこめて語り、
 かくの如き装いを以て非常に美しく身を飾り、
 天界の諸快樂に、よく通暁したり。
98. 〔私たちは〕歌詠・器楽・舞踊に熟達し、
 享樂のために美しき姿を具して現れたり。
 愛欲を切望せる女たちを、もし貴方が欲せざるとすれば、
 貴方は、この世にて、甚だしくも、みごとに欺かれたり。
- 398 99. 財の樂事²⁰⁴を知らざる、愚かなる、ある人が、
 宝を見つけたにもかかわらず、逃走するが如く、
 貴方もまた、愛の享樂を知らずして、
 自ら来たる姦女たちを享受せざらば、それと同様なり。

すると、その時、比丘らよ、菩薩は、眼を瞬きさせることなく、微笑を浮かべ、破顔一笑して、
 感官に惑乱あることなく、身体に気取りあることも疚しきところもなく、愛著なく、瞋恚なく、愚
 癡なく、山王の如く不動にして、怯弱ならず、当惑せず、物怖じすることなく、ゆるぎなく確立せ
 られたる覚知を以て、〔また〕諸煩惱を徹底的に滅除せるが故に自らに依止する正智の法門を以て、
 温和にして甘美なる語言と、梵天を超過せる《音響と²⁰⁵》、カラヴィンカ鳥の啼声と、美妙にして
 優美なる音声と²⁰⁶を以て、かの、マーラの娘たちに、偈によって返答したり。

²⁰¹「清浄なる」(visuddha) に当たるチベット訳は「満開の」(rgyas pa) となっており、梵文と合わない。

²⁰²kunda は「ジャスミンに属する素馨（そけい）の一種」とされる「モクセイ科の常緑小低木」で、「夏に白い花をつけ、強い芳香を放つ」という（『広辞苑』第六版「素馨」参照）。

²⁰³「愛楽」とは「愛の享樂」の意である。

²⁰⁴「財の樂事」とは「財産で楽しむこと」の意である。

²⁰⁵「音響と」(ghoṣeṇa) は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

²⁰⁶チベット訳には「音声と」(svareṇa) に当たる訳語がない。訳者の見落としと思われる。

100. 愛欲は、実に、多くの苦悩の集積にして、苦の根本なり。
もろもろ 諸の患者をしてぜんじょう 禪定とじんりき 神力とくぎょう 苦行とを喪失せしむ。
 「婦女とのよくらく 欲楽に満足あることなし」と、賢者は言えり。
 われは、諸の患者をして智慧を以て満足せしむべし。
101. 愛欲にふけ 耽るならば、かつあい 渴愛はますます増大すべし。
 あたかも、誰かある人が塩水を飲めるが如し。
- 400 そこ（愛欲）に陥りたる者に自己の利益なく他者の利益もなし。
 われは自己の利益と他者の利益とを切望する者なり。
102. 汝 [ら] の²⁰⁷姿は水沫か泡沫《に似たもの²⁰⁸》の如くにして、
まぼろし 幻の彩色《の如く²⁰⁹》、自らの想念によって創作せられたり。
 まさしく夢の中の遊戯の如く、ゆうぎ 堅実ならず、けんじつ また恒常ならずして、
こうじょう 愚かなる若者の心を、常に惑乱せしむ。
103. [人の] まなこ 眼は、水の泡《に似たもの²¹⁰》の如くにして、皮膚に覆われ、
かたまり 血の塊が堅くなって突出したるしゅよう 腫瘍の如きものなり。
 腹部は、尿と糞との集積にして、はなはだ不浄なり。
 苦悩の装置²¹¹ 《の如きもの²¹²》にして、ごう 業とぼんのう 煩惱からしやうき 生起せり。
104. 凡愚なる者たちは、それに惑乱せられ、てんどう 顛倒²¹³により、
 身体を清浄なるものと妄想すれど、智者は然らず。
 苦悩の根源たるりんね 輪廻に、ちやうじ 長時にわたりてんしやう 転生するならば、
もろもろ 諸の地獄において、多くの耐え難き苦痛を受くべし。
105. 臀部からは、不快なる悪臭物を漏泄し、
もも すね 腿と脛と足とは、器械の如くにけいりゆう 繫留せられたり。
 われ、汝らを真実に観察すれば、幻の如くにして、
 顛倒せる因と縁より生起したるものなり。
106. 高貴なる正智道にある者には、顛倒せる邪道なりて、
しょうちどう 火炎か毒の葉の如く、また、じやどう 忿怒せる大蛇の如し。
- 402 美德なくして、徳を喪失せしめる、愛欲の享楽を見て、
 そこに、ぐまい 愚昧なる者たちは迷悶し、《故に²¹⁴》安楽の想念を生ずる。
107. 愛欲の故に女人たちの奴隷になれるところの人、
 法の楽を捨てて、愛欲によりかんらく 欲楽するところの人、
 その者は、快樂を熱望して、持戒の道よりじかい 逸脱し、[また]
 禪定の道より逸脱し、覚知を喪失して、正智より遠く離れて住する。

²⁰⁷「汝の」(tava) は単数形であるが、場面としては複数形でなければならない。

²⁰⁸「似たもの」(tulya) は東大写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

²⁰⁹「如く」(iva) は東大写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

²¹⁰ 上註208に同じ。

²¹¹「苦悩の装置」(duḥkha-yantra) とは「苦悩を生み出す器械」の意である。

²¹²「～の如きもの」(yathā) は全写本に欠落しているが、韻律によれば挿入すべきである。

²¹³「顛倒」とは「真理とさかさまの誤った考え (謬見)」である。

²¹⁴「故に」(atah) は全写本に欠落しているが、韻律によれば挿入すべきである。

108. われは、^{よくじょう しんに}欲情や瞋恚と共に住することなくして、
^{じょう けん}常[見]・^{じょう けん}淨[見]・^{じょう けん}我[見]²¹⁵と共に住することもなし。
 不快[感]とも、また快[感]とも、共に住することなくして、
 わが心は全く解放せられ、^{てんくう}天空の風の如し。
109. たとえ汝の如き者たちによって、この一切世間が充満し、²¹⁶
^{いくこう}幾劫もの間、そのような者たちと共に交わりて暮らそうとも、
 われに^{ふんこん}忿恨あることなく、また^{くち}欲情もなく、^{ぐち}愚癡あることもなし。
^{しょうしゃ}勝者（仏陀）の心は^{こくう}虚空に似たるものの如くなればなり。
110. たとえ、この世において、天神や天女は非常に無垢にして、
 血も骨もなく、清淨なりといえども、
 彼らもまた、みな、大いなる恐怖のうちに暮らせり。
 永遠性を欠き、^{じょうじゅう}常住ならざるが故なり。
- 404 すると、その時、かの、^{みわく}婦女の媚惑に熟達せる、マラーの娘たちは、さらにいっそう、情欲と興
^{いんび}奮と淫靡とを現わし、^{びたい}媚態を示して、全身を飾り立て、^{げんわく}婦女の幻惑を示現して、菩薩を誘惑したり。
 そこで、かくの如く言われる。
111. ^{ぎによ}妓女の中で最も魅力あるトリシュナーとラティとアーラティ²¹⁷とは、共に、
 マーラに遣わされ、いとも艶やかに装いて、速やかに来たれり。
 若葉の^{しげ}繁る樹の若枝が風に揺れる《が如く²¹⁸》、[彼女たちは]
 舞い踊りつつ、[菩提]樹の^{ねもと}根元に坐せる王子を誘惑せり。
112. 「今は、春の時節にして、最高に美しき季節なり。
^{あんみょう じんあい}暗冥も^{しよだんじよ}塵埃も除き去り、^{むれ}諸男女に喜びを与え、鳥の群に満ちて、
 コーキラ（郭公）やハンサ（鶯鳥）やモーラ²¹⁹（孔雀）が^な啼けり。
 性愛の^{りどく}利得たる^{おとず}快樂を享受すべき時が訪れたり」[と]。
113. 千劫もの間、^{じかい}持戒に専念し、^{こんかい}禁戒と^{しゆじゆう}苦行とを修習し、
 山王の如く不動にして、昇り来たれる^{あさひ}旭日の如き姿をなせる、
 語音は雷鳴の如く美妙にして、^ほ獸王の吼えるが如き^{おんじゆう}音声の、
 かの、^{りやく}生類を^{けんか}利益なす者（菩薩）は、有益なる言葉を語りたり。
114. 「愛欲の^{とうじゆう}鬭諍と^{けんか}敵意と^{けんか}喧嘩とは、^{おとず}煩惱を伴い、^{おとず}恐怖を生ぜしむ。
^{ぐぶつ}愚物なる人は^{けんか}熱中すれども、^{けんか}賢明なる人には常に^{だき}唾棄せられたり。
 406 ^{しよぜんぜい}諸善逝によって^{かんろ}甘露（菩提）が得られたる、その時が到来したり。
 今日、[われは] マーラを打ち破って、^{じゅうりき}十力²²⁰を有する^{あらかん}阿羅漢に成るべし」[と]。
115. [彼女たちは] 幻惑を示現しつつ言えり。「蓮華の^{かんばせ}顔容を有する者よ、聞きたまえ。

²¹⁵「常見・淨見・我見」とは「無常・不淨・無我の現実を常・淨・我と妄想する謬見」である。

²¹⁶この一行のチベット訳は「たとえ汝の如き一切の衆生によって、この世が充満し」という意味の訳文になっている。

²¹⁷tṛṣṇā, rati, āraṭi は前から順に「渴愛」「愛戯」「歡樂」の意である。

²¹⁸「如く」(iva) は全写本に欠落しているが、韻律によれば挿入すべきである。

²¹⁹mora は mayūra の訛音である。

²²⁰「十力」については、第19巻第1号所載の拙訳（註36）を参照されたい。

貴方は、強大なる大地の主・至上の支配者と成りたまうべし。
華麗なる姝女衆によって、千もの楽器が演奏せられてある時に、
貴方は²²¹牟尼の服装などして何を為さんや。棄てて快樂を享受されたし」[と]。

菩薩は言えり。

116. われは、三界における支配者として、天界や人間界にて尊重せられ、
法輪を以て進軍し、[如来の]十力を有する、強大なる王に成るべし。
那由多もの有学と無学²²²とを[わが]子とし、常に[彼らに]敬礼せられ、
法樂を歡樂すれども、感官の対象によってわが心が歡樂することなし。

彼女たちは言えり。

117. 青春が未だ去らずして、最良の年齢に在るうちに、
また、貴方が未だ病気に罹らず、忌むべき老年に達せざるうちに、
また[貴方が]美貌と²²³若さとを有し、私たち伴侶もまたそうであるうちに²²⁴、
そのうちにこそ、笑顔浮かべて、愛欲の歡樂を享受されたし。

菩薩は言えり。

118. 今日、得難き甘露の[菩提に達する]好機が得られたるうちに、
また、阿修羅界や天界における無暇處の患難を免れてあるうちに、
また、老と病と死という敵衆が暴怒するに至らざるうちに、
そのうちにこそ、われは畏懼なき都城に導く至上の道を修習すべし。

彼女たちは言えり。

119. 天の宮殿において、三十三天界の主(インドラ)が天女に囲まれ、また、
ヤーマ・スヤーマ・サントウシタ²²⁵等の諸天界や、マーラの都城において、
[天王たちが]華麗なる天衆に讚美されるが如く、[貴方も]姝女衆に身を委ねて、
愛欲を享樂し、遊戯し娛樂して、私たちと共に、大いなる快樂を交歡すべし。

菩薩は言えり。

120. 愛欲は草の露滴の如く儂くて、秋の雲にも似たり。
激怒せる雌蛇の如く、激しき恐怖をもたらすものなり。
インドラ(帝釈)・スヤーマ・兜率天等はナムチの支配下にあり。
卑賤なる者たちが愛好する、この災厄に満ちたるものを、誰が歡樂すべけんや。

彼女たちは言えり。

121. これらの端麗なる樹木が若葉をつけて、花開きたるを御覽あれ。
コーキラやジーヴァンジーヴァカ²²⁶が鳴き、蜜蜂の羽音に満ちたり。
地面には草が生え、青々として柔らかく、螺旋状に巻いてしなやかなり。

²²¹ チベット訳には「貴方は」(bhavato)に当たる訳語はない。

²²² 「有学」とは「阿羅漢果にまで達しておらず、まだ学ぶべきことが残っている段階にある修行者」であり、「無学」とは「阿羅漢位に到達した修行者」である。

²²³ チベット訳には「美貌」(rūpa)に当たる訳語はない。

²²⁴ 「そうであるうちに」の部分、チベット訳では「青春期にあるうちに」という意味の訳文になっている。

²²⁵ yāmaは「夜摩天」であり、suyāmaは「夜摩天王の名」であり、saṃtuṣitaは「兜率天王の名」である。

²²⁶ kokilaは「郭公」である。jivamjivakaは「共命鳥」であるが、ここでは韻律のためにjivajivakaと表記されている。

緊那羅²²⁷の衆が奉仕する森の中にて、美しき^{きによ}妓女たちと²²⁸歡樂せられたし。

菩薩は言えり。

122. 地面より生えたる草を太陽が枯らしむる、その時には、
[今] 若葉をつけたる、これらの樹木も、[過酷な] 時節のために²²⁹開花せず、

410 [今] 花に近づく蜜蜂たちも、飢渴に苦しめられる²³⁰。われは、今こそ、
往昔の勝者（過去仏）たちに享受せられたる甘露を、必ずや受用²³¹せん。

マーラの娘たちは言えり。

123. 月の顔容^{かんぼせ}ある者よ、しばらく²³²御覽あれ。[私たちは] 瑞々しき蓮華にも似て²³³、
柔軟かつ甘美に語り、齒は白銀か雪の如く[く白]し。

かくの如きは天界にても得難きものなれば、人間界にては尚更なり。

至高の天神たちによって常に望まれしところのものが、[今] 貴方に得られたり。

菩薩は言えり。

124. 肉体は不淨なる糞穢と蛆虫の群に満ち、牢固ならずして、
すぐに散失し壊滅する、悲哀の充溢せるものと[われは] 観る。

動くものと動かざるものとの[全ての] 生類に至上の安樂をもたらす、

賢者[たち]に尊崇せられたる、不滅なる、その地位を[われは] 得ん。

125. 彼女たちは、実に、六十四もの愛の技芸を試用して、

足環や金帯を鳴り響かせ、衣服をはだけて、

愛欲の矢に射抜かれ、発情して、嘲笑いながら[言えり²³⁴]、「高貴なる子よ、

[この者たちを²³⁵] 享受しないとすれば、貴方に何か欠陥ありや」[と]。

【菩薩は言えり。²³⁶】

126. 一切世界の罪過を了知して、塵垢を除去したる者（菩薩）は言えり。

「愛欲は劍か槍か投槍²³⁷の如くにして、蜜を塗れる剃刀にも似たり。

412 牝蛇の頭か火坑²³⁸の如きものと、われは、今、正しく了知せり。

女人は徳を奪うものなり。それ故に、われは婦女衆を捨て去れり」[と]。

²²⁷ kīṃnara は「天界の樂神」である。

²²⁸ 「森の中にて、美しき妓女たちと」の部分、チベット訳では「優雅なる森の中にて、妓女たちと」という意味の訳文になっている。

²²⁹ 「中巻」には「時に従いて」と訳したが、「時節のために」に訂正する。

²³⁰ 本偈の冒頭からここまでの部分のチベット訳は「若葉をつけたる、これらの樹木は、時に従って開花し、また、蜜蜂たちは飢渴に苦しめられて諸の花に近づく[のみなり]。時が移れば、地面より生えたる草をも太陽が枯らしむべし」という意味の訳文になっている。

²³¹ 「受用」とは「受けて用いること」である。

²³² チベット訳には「しばらく」(tāva[= tāvat]) に当たる訳語はない。

²³³ 「蓮華にも似て」の部分、チベット訳では「蓮華の如き顔を持ち」という意味の訳文になっている。

²³⁴ 「言えり」の原文はないが、チベット訳には「かくの如く言えり」(ḥdi skad smras) との訳文が付加されている。

²³⁵ チベット訳には「この者たちを」(ḥdi dag) が挿入されている。

²³⁶ 「菩薩は言えり。」の原文は東大主要写本には記載されず、チベット訳にも相当訳文がないから、削除すべきものと思われる。

²³⁷ 「投槍」(śūla) に当たるチベット訳は「三叉戟」(rtse gsum) となっており、梵文と合わない。

²³⁸ 「火坑」とは「火の燃えさかる穴」の意。

127. 彼女たちは、幾那由多もの種類の姝女の技量を示したるも、
若き象の如き態度を有する善逝（菩薩）を誘惑すること能わざりき。
[その時] 慎みと羞恥心より恥を感じて、牟尼（菩薩）の前に平伏し、
敬意と²³⁹喜びと好意とを生じて、利益者²⁴⁰（菩薩）を讚歎せり。
128. 「無垢なる蓮華の花芯に似たる、秋の月の如き顔容ある者よ。
酥油を以て供物に点火された火光にも似たる、黄金の山の如き者よ。
御身が²⁴¹ [幾] 百もの生にて修行し、熟考し [て立て] たる²⁴² 誓願を成就されたし。
自ら [彼岸に] 渡りたるのち、苦悩に満ちたる衆生を渡らせたまえ」 [と]。
129. 彼女たちはカルニカーラ樹かチャンパカ樹²⁴³の如き [菩薩] を種々に讚歎し、
超絶せる山の如くに不動なる [菩薩] を右遷なせるのち、
戻りて、父に頭面礼足²⁴⁴して、かくの如き言葉を述べたり。
「いざ²⁴⁵、父よ、天神と人間との師なる者への²⁴⁶ 憎悪を捨てたまえ。
130. [菩薩は] 顔に微笑を浮かべ、蓮華の葉のごとき眼を以て視たまえり。
愛欲を以て人を視ることなく、また、眉をしかめて視ることもなし。
メール山が震動し、大海が涸渇し、日月（太陽と月）が落下しようとも、
三界（輪廻界）の過悪を知悉せる彼が、婦女子になびくことはなし」 [と]。

さて、その時、マーラ（悪魔）波旬は、この言葉を聞いて、なおいっそう苦悩し、落胆し、憂愁
414 し、忿怒に駆られた心を以て、かの、自分の娘たちに告げたり。「さて、なんすれぞ彼を菩提の
座より起たしめ得ざるや。愚蒙かつ無知なる者ならば、汝らの美貌を視ざる筈のあらんや」 [と]。

すると、その時、かの、マーラの娘たちは、自分たちの父に、偈によって返答したり。

131. [彼は] 温和かつ優美に語り、また、貪欲ある²⁴⁷ ことなし。
重大なる奥秘²⁴⁸を観察し、また、瞋恚あることなし。
諸の威儀と諸行とを認識し、また、愚癡あることなし。
肉体の全てを正しく評定し、心意は甚だ深妙なり。
132. [彼は] 女人の過悪の甚大なるを、明確に知悉し、
染著なき心を有し、愛欲への執着あることなし。
この天にも地にも、彼の心と諸行とを熟知しうるところの、
そのような天神も人間も、全く存在せざるなり。

²³⁹ チベット訳には「敬意と」(gauravu) に当たる訳語はない。

²⁴⁰ チベット訳は「かの利益者」という意味の訳文になっている。

²⁴¹ チベット訳には「御身が」(ti) に当たる訳語はない。

²⁴² チベット訳は「熟考して立てたる」という意味の訳文になっている。

²⁴³ karṇikāra も campaka も「色香に秀でた花をつける樹木の名」である。方広の当該部分は「以建尼迦花及詹波花散菩薩上（建尼迦花及び詹波花を以て菩薩の上に散じ）」という訳文になっている。

²⁴⁴ 「頭面礼足」とは「尊者に対する最上級の礼法」で、「ひざまずいて顔を地面に接し、相手の足を手のひらで受け、これに顔や頭を触れる作法」（『広辞苑』第六版参照）である。

²⁴⁵ チベット訳には「いざ」(sādhu) に当たる訳語はない。

²⁴⁶ チベット訳には「師なる彼への」(bla ma de la) と訳されている。

²⁴⁷ 『中巻』には rakto を「愛著ある」と訳したが、「貪欲ある」に訂正する。

²⁴⁸ 『中巻』には guhya を「秘密」と訳したが、「奥秘」に訂正する。

133. そこ（天・人の世界）において、^{ぎにょ}妓女の幻惑を示現せられたならば、
父よ、愛欲あるところの、その者の心は溶解すべきなるも、
それ（妓女の幻惑）を視ても、彼の心は微動だにせざりき。
山王中の王の如く、彼は、動揺することなく安坐せり。
134. ^{いく}幾も^{コーティ}の福德の威光に満ち、^{わた}功德の光輝みなざりて、
幾拘胝もの劫に亘り、^{こんしゆ}持戒と苦行²⁴⁹とを勤修したり。
- 416 天神や梵天等の、清浄なる威光に輝く衆生たちも、
彼の足元に^{ずめん}頭面をつけて礼拝せり。
135. 必ずや、彼は²⁵⁰、マール（悪魔）の軍勢を打ち破り、
往昔の勝者に愛好せられたる、無上の菩提を得たまわん。
父よ、私たちは戦闘にて〔彼と〕争うことを望まざるなり。
力ある者と戦闘する、この方策は甚だ困難なり。
136. 父よ、見られたし。空中には、^{ちようけい}頂髻²⁵¹に^{じゆほう}珠寶をつけたる、
^{ナユク}那由多もの〔多くの〕^{とうがくぼさつ}等覺菩薩²⁵²が、うやうやしく侍立せり。
寶石に満ち満ちて、花環を以て身体を飾りたる〔彼ら〕は、
諸の^{じゅうりきそん}十力尊（仏陀）によって、^{つか}供養のために、ここに遣わされた者たちなり。
137. 思覺（精神作用）あるものたちや、思覺なきものたち、
樹木や山岳、^{こんじちよう}ガルダ（金翅鳥）王や天王や夜叉たちが、
功德の山なる者（菩薩）に対面して、お辞儀をなせり。
父よ、今日は、退却するが至当なるべし。
さらにまた〔言わく〕、
138. あるものの向こう岸（対岸）に渡らずしては、それを渡り終えることなく、
あるものを根より抜き出さずしては、それを掘り出し終えることなからん。
ある者に重ねて^{かんじよ}寛恕を請うならば、その人を怒らしむることなかるべし。
あることにより悲哀を生じるとすれば、それを^な為すべきにあらず。
- 418 さてまた、比丘らよ、その時、八名の菩提樹の女神²⁵³ありき。すなわち、シュリー（吉祥²⁵⁴）、
ヴリッディ（増長）、タパー（苦行）、シュレーヤシー（安寧）、ヴィドゥ（聡明²⁵⁵）、オージョーバ

²⁴⁹「苦行」(tapas) に当たるチベット訳は「禁戒」(brtul shugs) となっており、梵文と合わない。

²⁵⁰チベット訳には「彼は」(sa) に当たる訳語はない。

²⁵¹「頂髻」とは「頭頂の髻（もとどり）」の意。

²⁵²sambodhisattva は「最高の悟りに向かう者」すなわち「菩薩」の意味であるが、大乘仏教の菩薩は「等正覺を求める菩薩」であるから、ここでは「等覺菩薩」と訳した。「等正覺」は「一切平等の理に達した最高の正しい覚り」の意であるが、「新訳」では、等正覺と云ふは等覺の菩薩の事。この時は等は齊等の義でひとしい事。等覺の菩薩は仏に等しい事（『佛教語大辞典』1004頁参照）と説明されているので、ここでは、文脈も勘案して「仏陀の境地に等しい菩薩」という意味で「等覺菩薩」と訳した。なお、「等覺菩薩」の梵語が何であるかについては、諸辞書を調べても明確ではない。

²⁵³チベット訳には単に「樹の女神」(śiñ gi lha mo) と訳されており、「菩提」(bodhi) に当たる訳語はない。

²⁵⁴「中巻」には「功德」と補訳したが、「吉祥」に訂正する。

²⁵⁵「中巻」には「聡慧」と補訳したが、「聡明」に訂正する。

ラー（威力²⁵⁶）、サトヤヴァーディニー（実語）、及びサマンガニー²⁵⁷（全備）なり。《彼女たちは²⁵⁸》菩薩を《ねんごろに》供養してから²⁵⁹、十六相を以て菩薩の威徳を称揚し²⁶⁰、讚歎せり。

139²⁶¹ 清浄なる²⁶²衆生よ、御身は、白分^{びやくぶん}の²⁶³（満ちゆく）月の如く明浄なり。

清浄なる²⁶⁴覚知ある者よ、御身は、昇り来たれる旭日の如く輝けり。

140. 清浄なる²⁶⁵衆生よ、御身は、水中の蓮華の如く満開なり。

清浄なる²⁶⁶衆生よ、御身は、森や林^{はいかい}を徘徊する獅子の如くに咆哮す。

141. 至高なる衆生よ、御身は、大海の中心にある山王の如く照り映えたり。

清浄なる²⁶⁷衆生よ、御身は、鉄围山^{てつちせん}の如く超出したり。

142. 至高なる衆生よ、御身は、測り難くして宝石に満ちたる大海の如し。

世間の導師^{どうし}よ、御身は、覚知^{はなは}広大にして虚空の如く無辺際なり。

143. 清浄なる衆生よ、御身は、覚知甚だ堅固にして大地の如き一切衆生の所依なり。

至高なる衆生よ、御身は、汚れなき覚知ありてアナヴァタプタ²⁶⁸池の如く常に清涼なり。

144. 至高なる衆生よ、御身は、停頓^{ていとん}せざる覚知ありて風の如く常に一切世間に愛著せず。

420 至高なる衆生よ、御身は、近づき難き者にして火焰王^{かえんおう}の如く一切の僣慢^{きょうまん}を焼尽せり。

145. 至高なる衆生よ、御身は、剛力^{なうらうやな}ありて那羅延天の如く鎮圧し難し。

世間の導師よ、御身は、誓約堅固にして菩提の座より起つことなき者なり。

146. 至高なる衆生よ、御身は、退転^{いんとら}せざる者にして帝釈の手より放たれた金剛杵^{こんこうしよ}の如し。

至高なる衆生よ、御身は、善利を獲得せる者にして遠からず十力具足者^{じゅうりきくそくしゃ}と成るべし²⁶⁹。

以上の如く、実に比丘らよ、菩提樹の女神たちは十六相を以て菩薩の威徳を称揚したり。

その時、比丘らよ、浄居天^{じょうごてん}に属する天子たちは十六相を以てマーラ（悪魔）波旬²⁷⁰の勢力^{げんたい}を減退

²⁵⁶『中巻』には「大力」と補訳したが、「威力」に訂正する。

²⁵⁷以上八名の女神名の原語は前から順に śrī, vṛddhī, tapā, śreyasī, vidu, ojobalā, satyavādinī, samaṅginī である。

²⁵⁸「彼女たちは」(tāḥ) は東大主要写本に欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

²⁵⁹saṃpūjya は「ねんごろに供養してから」の意であり、チベット訳にもそのように訳されているが、東大主要写本には単に pūjya (供養してから) とあり、saṃ が欠落している。

²⁶⁰チベット訳は「十六相の威徳を以て菩薩を称揚し」という意味の訳文になっている。

²⁶¹以下、第139偈から第162偈までは散文調であり、厳密には韻律のない長行である。そのために、E. Müller, W. Schubring とともに「これらは韻文にあらず」と指摘しているが、Śāntibhikṣu Śāstri の校訂本では Gāthā Gadyagati (散文調の偈) として偈番号が付されている。確かに厳密な韻律はないが、リズムカルな繰り返し認められるので、本稿でも、一種の韻文類と見なすことにする。なお、方広にはこの箇所該当する訳文は見当たらない。普曜 (大正大蔵経第三卷519下) には該当する訳文があるが、韻文ではなく散文(長行)で訳出され、「十六事」を以て菩薩を讚歎するのは単に「樹神」であって、「八名の菩提樹女神」との表現はない。

²⁶²「清浄なる」(viśuddha) に当たるチベット訳は「至高なる」(dam pa) となっており、梵文と合わない。

²⁶³「白分」と「黒分」については、第19巻第1号所載の拙訳(註86)を参照されたい。

²⁶⁴「清浄なる」(viśuddha) に当たるチベット訳は「無上の」(rnam par dam pa) となっており、梵文と合わない。

²⁶⁵上註262に同じ。

²⁶⁶上註262に同じ。

²⁶⁷上註262に同じ。

²⁶⁸anavatapta は「無熱」の意味であるが、「ジャンブドゥヴィーバ洲(閻浮提)の中央にある池の名」とされ、「阿耨達池」と音訳される。

²⁶⁹『中巻』には「久しからずして十力具足(仏陀)と成りたまわん」と訳したが、「遠からず十力具足者と成るべし」に訂正する。なお、『中巻』には、この後にさらに「善利を獲得せられたり。」という一文が[659頁の第1行目に]残存しているが、これは校正ミスによるものなので消去されたい。

²⁷⁰チベット訳には「波旬」(pāpiyaṃsaṃ) に当たる訳語はない。

せしめたり。いかなる十六相²⁷¹によってか。すなわち、次の如し。

147. 波旬よ、汝は崩壊せしめられ、愁思^{しゅうし}せる老クローンチャ²⁷²の如し。

波旬よ、汝は非力にして、泥中^{ちんりん}に沈淪^{しんりん}せる老象の如し。

148. 波旬よ、汝は孤独にして、勇猛なる誓言を立てて敗れたるが如し。

波旬よ、汝は同伴^{りよはん}なくして、病氣^{かか}に罹り森中に捨てられたるが如し。

149. 波旬よ、汝は疲弊^{ひへい}して、重荷^{おもに}に苦しめられたる牡牛の如し。

波旬よ、汝は放棄^{ほうき}せられて、風に倒されたる樹木の如し。

422 150. 波旬よ、汝は悪路^{あくろ}に立って、道に迷える隊商人^{たいしょうじん}の如し。

波旬よ、汝は劣等中^{れつとうちゅう}の劣等にして、負債^{ひんきゅうしや}ある貧窮者の如し。

151. 波旬よ、汝は弄舌^{ろうぜつ}にして、鳴きわめく鳥^{からす}の如し。

波旬よ、汝は慢心^{たら}に囚われて、不寐^{ふしつけ}なる忘恩者^{ぼうおんしや}の如し。

152. 波旬よ、今日、汝は逃走^{ししよく}すべし。獅子吼^{ししこう}にて逃げ去る狐狼^{ころう}の如く。

波旬よ、今日、汝は駆逐^{くちく}さるべし。毘藍風^{びらんふう}²⁷³に吹き散らされる鳥の如く。

153. 波旬よ、汝は時を知らざる者なり。福德の尽きたる乞食者^{こつじきしや}の如く。

波旬よ、今日、汝は捨棄^{しゃき}せらるべし。砂にまみれた損壊せる容器の如く。

154. 波旬よ、今日、汝は菩薩^{じょうぶく}により調伏²⁷⁴せらるべし。マントラ²⁷⁵による蛇の如く。

波旬よ、〔今日²⁷⁶〕汝は一切の力を奪われたり。手足を切断されたる胴体²⁷⁷の如く。

以上の如く、実に比丘らよ、浄居天に属する天子たち²⁷⁸は、十六相を以てマーラ波旬の勢力を減退せしめたり。

そこにおいて、比丘らよ、菩提〔樹〕に仕える天神たちは、十六相²⁷⁹を以てマーラ波旬^{ひせき}を非斥²⁸⁰したり。いかなる十六相によってか。すなわち、次の如し。

424 155. 波旬よ、今日、汝は菩薩により征服せらるべし。勇者による敵軍の如く。

波旬よ、今日、汝は菩薩により征圧^{せいあつ}せらるべし。大力士による非力なる力士の如く。

156. 波旬よ、今日、汝は菩薩により隠蔽^{いんべい}せらるべし。太陽の光輪による萤火^{ほたるび}の如く。

波旬よ、今日、汝は菩薩により吹き散らされるべし。大風による一握^{いちあく}の粉穀^{もみぐら}の如く。

157. 波旬よ、今日、汝は菩薩により戦慄^{せんりつ}せしめらるべし。獅子による野干^{やかん}の如く。

²⁷¹ 普曜には「十八事を以て波旬を毀謗する」とされている。

²⁷² kroñca(= krauñca)は鳥の一種で、「帝釈鳩」と訳される。

²⁷³ 「毘藍風」(vairambha)は「迅猛・旋風と漢訳する。劫末・劫初に吹き、速力が迅速でいたるところごとく破壊する暴風」(『佛教語大辞典』1135頁参照)である。

²⁷⁴ チベット訳には「菩薩により」(bodhisattvena)に当たる訳語はない。なお、「調伏」とは「こらしめ降伏させること」である。

²⁷⁵ mantraとは、この場合「呪文」の意である。

²⁷⁶ チベット訳には「今日」(adya)に当たる訳語はない。

²⁷⁷ 「胴体」(ruṅḍa)に当たるチベット訳は「人」(mi)となっており、梵文と合わない。

²⁷⁸ 「天子たちは」(devaputrāḥ)に当たるチベット訳は「天神たち」(lha rnam)となっており、梵文と合わない。

²⁷⁹ 普曜には「十六事を以て魔を覆蔽す」と訳されている。方広にはこの箇所該当する訳文は見当たらないが、「爾時菩提樹神。以十六種言詞毀訾魔王」(大正大藏經第三卷594下)との一文だけが挿入されており、この偈文に関わる文献の存在を知りながら敢えて省略したことが暗示されている。

²⁸⁰ 「中巻」には「貶斥」と訳したが「非斥」に訂正する。「非斥」とは「非難し排斥すること」である。

- 波旬よ、今日、汝は菩薩により倒壊せしめらるべし。根より伐られたサーラ樹の大木の如く。
158. 波旬よ、今日、汝は菩薩により壊滅せしめらるべし。大王による友軍なき都城の如く。
- 波旬よ、今日、汝は菩薩により枯渴せしめらるべし。強き日差しによる牛跡の水溜²⁸¹の如く。
159. 波旬よ、今日、汝は菩薩により逃走せしめらるべし。死刑になるべき悪漢が脱走したるが如く。
- 426 波旬よ、今日、汝は菩薩により騒乱せしめらるべし。火熱による蜜蜂の群の如く。
160. 波旬よ、今日、汝は菩薩により悲嘆せしめらるべし。王位を奪われたる法王²⁸²の如く。
- 波旬よ、今日、汝は菩薩により沈思せしめらるべし。羽を切られた老クローンチャの如く。
161. 波旬よ、今日、汝は菩薩により遭難せしめらるべし。剣難なる荒野にて糧食の尽きたる如く。
- 波旬よ、今日、汝は菩薩により沈没せしめらるべし。大海において難破せる船の如く。
162. 波旬よ、今日、汝は菩薩により枯衰せしめらるべし。劫火²⁸³による草木の如く。
- 波旬よ、今日、汝は菩薩により破碎せしめらるべし。大金剛杵²⁸⁴による山の峰の如く。

以上の如く、実に比丘らよ、菩提²⁸⁵ [樹] に仕える天神たちは、十六相を以てマーラ (悪魔) を非斥したり。されど、マーラ波旬は退転 (断念) せざりき。

そこで、かくの如く言われる。

163. 天神衆からの真実の諫言を聞きたるも、死神 (マーラ) は退却せずして [言わく]、
「起たせよ、打ちのめせ。この者を壊滅せしめよ。命を与えることなかれ。
- 428 この者は自ら [彼岸に] 渡りたるのち、わが領域から他の者をも度脱せしむべし。
起って退却するより他に [この] 沙門には他の如何なる釈放もなしと、われ断言す」 [と]。

菩薩は言えり。

164. 山王メールが根底から動揺しようとも、一切の生類が消滅しようとも、
全ての星辰群が、月もろともに天空から地上に落下しようとも、
一切衆生の思念がひとつに統合されようとも、大海の水が乾涸しようとも、
まさに樹王の根元に坐したる、われの如き者を動かすこと能わざるべし。

マーラは言えり。

165. われは愛欲の支配者にして、この一切世界の自在主なり。
天神や鬼神衆を含み、人間や禽獣たちも、
みな、われに占有せられ、われに服従せり。
われの領域に住する者 [たる汝] は、起って命令に従え。

菩薩は言えり。

166. たとえ汝が愛欲の支配者たらんとも、断じて自在主にあらず。
汝が真実にわれを見るならば、われもまた法の自在主なり。
たとえ汝が愛欲の支配者にして、悪趣に赴くことなからんとも、

²⁸¹「牛跡の水溜」とは「牛の足跡に溜まった小さな水たまり」の意である。

²⁸²「法王」(dharma-rāja)とは「正義の王」の意味であるが、インドではYama (閻魔)の称として用いられることが多い。

²⁸³「劫火」とは「劫滅」(一劫が終わり世界が破壊される時期)の終末に起こる「世界を焼き尽くす大火」である。

²⁸⁴チベット訳には単に「金剛杵」と訳され、「大」(mahā)に当たる訳語はない。

²⁸⁵東大主要写本によれば「菩提」ではなく「菩薩」(bodhisattva)であるが、文脈からみて「菩提」(bodhi)であり、「菩提樹」を指すものと考えられる。

自在ならざる汝の目の前で、われは菩提を証得すべし。

マールは言えり。

- 430 167. 沙門よ、[汝は] 自分独りで、閑静處にて、何を為さんとするや。
汝が希求するところのものに会遇するは、実に困難なり。
ブリグ²⁸⁶やアングラス²⁸⁷等 [の聖仙] が、苦行に精励したれども、
その至上の地位は得られざりき。況して人たる汝においてをや。

菩薩は言えり。

168. 忿怒に囚われたる心と、天界 [の至福] への愛欲とを持ち、
「常なり [あるいは] 無常なり」とアートマン²⁸⁸ (自我) に執著し、
諸国を遍歴する生活に解脱ありと固執せる、
無知に導かれたる仙人たちが、苦行に専念したり。
169. 彼らは、実際には道理なくして、人に [虚偽を] 語れり。
ある者たちは「遍在的²⁸⁹なり [いや] 限定的なり [あるいは] 常住なり」と言えり。
また他の者たちは「有形なり [いや] 無形なり」あるいは「グナ²⁹⁰なし [いや] グナあり」
「創造者あり [いや] 創造者なし」[など] と述べたり。
170. [われは] 今日、この座に坐して、慢心を克服し、
兵隊・軍勢もろともに汝を打ち破り、無塵なる菩提を証得し、
この世界の [苦悩の] 原因と発生とを、また、涅槃と、
苦悩の寂滅と、また、清涼なる境地とを説くべし。

[これを聞いて]

- 432 171. マールは憤怒し激昂し瞋恚を生じて、[菩薩の] 面前にて、粗暴なる言葉を発したり。
「この沙門を捕らえよ。独りで林中に捨てられた此の者を、儂の前から捕らえて連行し、
とっとと服従せしめよ。儂の宮殿に直ちに拘引し、一對の足枷と鉄鎖に繋ぎ、門番をさせよ。
苦痛に逼悩し、様々な呻き声を挙げつつ天神たちに隷従するさまを、われは自ら見物せん。」
菩薩は言えり。

172. 空中に種々の書画を、図形の部分ごとに分けて、それぞれ別々に描くことはできようとも、
諸方諸緯（四方四緯）に動く迅速なる風を、人が奮励して、縄で縛ることはできようとも、
闇の暗黒を除く照耀たる太陽と月とを、天空から地上に落下せしめることはできようとも、
汝らの如き者らが多勢にして数限りなくあろうとも、樹下よりわれを動かすこと能わざるなり。

[それを聞いて]

173. 彼ら²⁹¹ナムチの軍隊は威勢よく決起して、オーという喚声と、
法螺貝・太鼓・小鼓の勇壮なる音をとどろかせて、[言わく]

²⁸⁶ bhr̥gu は「火を発見して人類にもたらし木の中にこれを封じた」とされる「神話の種族の名」であると同時に、その祖先たる聖者の名であり、彼は Varuṇa の息子とされ、「七聖仙の一人」ともされる（『梵和大辞典』参照）。

²⁸⁷ aṅgiras は「ヴェーダ讃歌の著者とされる聖仙の名」であり、その複数形はアタルヴァ・ヴェーダを意味する。

²⁸⁸ ātman とは「永続する自己の主体として想定される靈魂」であり、「我」「自我」「靈我」等と訳される。

²⁸⁹ 『中巻』には「偏在的」と誤記したので、「遍在的」に訂正する。

²⁹⁰ guṇa とは「物質を構成する根本的要素」であり、サーンキヤ哲学では sattva（純質）と rajas（激質）と tamas（翳質）との三つのグナがあるとされる。

²⁹¹ チベット訳には「彼ら」(sā) に当たる訳語はない。

- 「おお、子よ、いとし子よ。これらの、物凄く怖ろしき、
ナムチの軍勢を見ながら、お前は何ゆえに遁走せざるや。
- 434 174. ジャンブー河産の黄金か、チャンパカ樹の花芯の如く、赫奕たる者よ。
極めて優美なりて、天神・人間に称讃されたる、供養せらるべき者よ。
汝は、今日、大戦闘において、壊滅するに至り、
阿修羅がインドラによ〔り壊滅す〕るが如く、マーラの軍門に降るべし。
[これを聞いて]
175. 梵天の音声とカラヴィンカ鳥²⁹²の囀りとを以て、
善逝(菩薩)は、彼ら夜叉・羅刹の衆に告げたり。
「虚空を恐懼せしめんと欲するところの愚昧なる者、
その者が、われの如き者を最勝樹²⁹³の下より捕捉せんと欲する²⁹⁴。
176. 大千²⁹⁵ [世界] を破壊して、[その] 屑を数えうるところの、
また、身毛によって大海の水を汲み出しうるところの、
あるいは、金剛より成る堅牢なる山を刹那に破碎しうるところの、
その者ですら、[菩提] 樹下に坐せるわれを悩乱せしめうることなし」[と]。
[それを聞いて]
177. マーラは怒り心頭に発して、鞭の長さよりも近き所に立ち、
鞘から抜きたる鋭い剣を手に持って [言わく]、
「沙門よ、即刻起ち上がり、われの意に従って立ち去れ。
緑の [若い] 竹の茎 [を切るか] の如く、今日 [われが] 汝を切ることのなきように。」
菩薩は言えり。
178. たとえ、この三千 [世界] の全ての大地がマーラによって充滿し、
全ての [マーラの] 手に、高壮なるメール山の如き剣があろうとも、
436 彼らはわれの身毛をだに動かすこと能わず。況してわれを殺害することをや。
誘惑者よ、あまり声高に叫ぶことなかれ。
いざ、われは汝に堅固さというものを思い知らしむべし。²⁹⁶
[これを聞いて]
179. 駱駝・牛・象の頭を持てる、また、怖ろしき眼を有する者たち、
戦慄すべき、猛毒のある蛇や見毒のある蛇どもが²⁹⁷、
灼熱せる火の色の峯を有する山を投げつけ、
根付きの樹木や、また、銅や鉄を投げ散らしたり。
180. 雲の如くに屹立し、四方に咆哮しつつ、

²⁹² kalaviṅka については、第21巻第1号所載の拙訳(註128)を参照されたい。

²⁹³ 「最勝樹」(drumavara) とは、この場合「菩提樹」を指す。

²⁹⁴ 「捕捉せんと欲する」の部分のチベット訳は「起たしめんと欲する」という意味の訳文になっている。

²⁹⁵ 「大千」(mahāsahasra) のチベット訳は「大三千」(stoñ gsum chen po) となっている。

²⁹⁶ チベット訳は「誘惑者よ、あわてるなかれ。少しの時間を費やして、われは [汝に] 堅固さというものを思い知らしむべし」という意味の訳文になっている。

²⁹⁷ 「蛇どもが」の部分のチベット訳は「蛇の如き者どもが」という意味の訳文になっている。

- こんこう らいでん こんきゅう
 金剛の雷電や、鉄の剛球や、鋭利なる剣・槍・斧や、
 また、毒を塗った矢を、雨と降らしめ、²⁹⁸
 大地を穿ち砕いて、諸の樹木を摧破したり。
181. ある者たちは百本の腕によって百の矢を放ち、
 口から、猛毒を有する蛇や火焰を吐けり。
 また、摩竭魚等の魚類を海中から捕らえ上げ、
 ある者たちは金翅鳥に変化して、竜を放擲したり。
182. ある者たちは、憤怒の形相で、須弥山ほどもある鉄球や、
 灼熱せる火の色の峰頂を投下したり。
- 438 また、地面に降り来たって、大地を震動せしめ、
 地下の水聚の水を攪拌したり。
183. ある者たちは、彼（菩薩）の前に、あるいは後ろに飛び跳ね、
 「おお、愛子よ」と言っでは、右や左に飛び跳ねたり。
 手と足が逆さまに付いており、頭が燃え上がり、
 眼より稲妻の如き閃光を發したり。
184. 奇怪なる醜貌の、ナムチ（悪魔）の軍勢を見たれども、
 清浄衆生（菩薩）は幻術により生じたものの如くに観察したり。
 「ここにマーラはなく、軍隊なく、生類なく、アートマンもなし。
 三界（全世界）は水中の月の影像の如く回転せり。
185. 眼も、女も男もなく、また、我所²⁹⁹（自己の所有するもの）もなし。
 耳も鼻も同様にして、また、舌も身も同様なり。
 これらの法は作者（行動主体）と受者（感受主体）とを超脱してあり、
 縁によって生起し、内（六根）も空にして外（六境）³⁰⁰も空なり」[と]。
186. 常に真実を語る彼（菩薩）は、真実の言葉を告げたり。
 「真実の言葉によれば、この世における諸法（万物）は全く空なり」[と]。
 [その時] 律に随順するところの、温和なる夜叉たちありて、
 彼らは、[自身の] 手にしたる武器を花環と観たり。³⁰¹
187. 彼（菩薩）は、華麗なる羅網に飾られたる、
 銅色の明浄なる爪と千輻輪相とを有する、

²⁹⁸「斧や、また、毒を塗った矢を、雨と降らしめ」の部分のチベット訳は「また、毒を塗った斧を降らしめ」という意味の訳文になっている。

²⁹⁹「我所」（ātmanīya[= ātmiya]）とは「我之所有の略」であり、「自己の所有するもの」であると同時に「自己の所有するもの（わがもの）」という意識を指す。仏教では「無我」を説くので、「我（本体としての自己）」は存在せず、したがって「我の所有するもの」も存在しないので、「わがものという意識（我所）」は妄念であることになる。

³⁰⁰「内」（adhyātma）とは「主体に内属する六つの感覚・知覚器官（眼・耳・鼻・舌・身・意：六根）」であり、「外」（bahis）とは「六根の認識対象となる外界の事物の特性（色・声・香・味・触・法：六境）」を指す。六根も六境も「実体性・常住性」がなく、常に変化流動するので「空」であるとされる。

³⁰¹本偈の全文のチベット訳は「真実の原語によれば、この世の法（万物）は全く空なれば、律に随順する、温和なる夜叉たち、彼らは、手に持てる武器を花環と観たりと、常に真実を語る彼（菩薩）は、真実の言葉を告げたり」という意味の訳文になっている。

- 440 ジャンブー河産の黄金の如く輝く、善浄なる福德の慶瑞³⁰²たる、
右の掌で、悠然と、頭上から足の先までを撫でたり。
188. [菩薩は] 天空からの稲妻の如く、腕を伸ばすや否や、言明したり。
「この大地がわれの証人なり。われは、かつて、那由多もの[多くの]、
種々なる祭式を設けたり。来乞者³⁰³に対して、与えずと[思念し³⁰⁴]て、
[彼らを] 無益たらしめたることは決してなかりき。
189. 水も火も、また風も、まさしく、われの証人にして、
生類の主なるブラフマンも³⁰⁵、星辰を従えたる日月も、
十方に住したまえる諸仏陀や、われ自身の戒行・禁戒、
菩提肢分(七覚支³⁰⁶)もまた、同じく、われの卓越せる証人なり。
190. 布施も持戒も、また忍辱も、われの証人なりて、
精進も、また禪定も、また同じく智慧(般若)も、
四無量[心]も、同じく神通[力]も、われの証人なり。
次第に進展する[われの]菩提行³⁰⁷の全てが、今ここに³⁰⁸、われの証人なり。
191. 十方[の世界]に存在する限りの、全ての衆生、
その者たちの福德・力³⁰⁹・持戒、また正智と、
無遮にて設けたる祭式(無遮施会³¹⁰)とを合計しても、
それらは、わが身毛の百分の一にも及ばざるなり」[と]。
192. 彼(菩薩)が、悠然として、手で大地を打つや、
この大地は、青銅の壺の如くに、音響を発したり。
- 442 マーラ(悪魔)は[その]音を聞くや、地面に倒れ伏し、
「黒闇の親族(悪魔)を捕らえよ、殺せ」との声を聞けり。
193. 身体より発汗し、威光は消失し、顔色は青ざめて、
マーラは、自身が老に侵されゆくさまを觀たり。
恐怖におののき、庇護する者もなく、胸を叩いて泣き叫び、
ナムチ(悪魔)の意識は混乱し、心は悶絶するに至れり。
194. [魔軍の]象・馬・馬車・戦車は地面に転倒し、
羅刹・鳩槃荼・ピシャーチャ³¹¹たちは恐れて逃走したり。
[彼らは]迷悶し、逃げ道を失い、依處も避難處もなく、

³⁰²「慶瑞」とは「吉慶なる瑞相」の意である。

³⁰³「来乞者」(yācanaka)とは「布施を求めて来たる者」の意である。

³⁰⁴チベット訳には「思念し」に当たる訳語(sñam ste)がある。

³⁰⁵【中巻】には「ブラフマン(梵天)やブラジャーパティ(生類の主)も」と訳したが、チベット訳を参考に「生類の主なるブラフマンも」に訂正する。ただし、brahmanとprajāpatiを別の神格と見なすことも依然として可能である。

³⁰⁶【七覚支】については、第19巻第1号所載の拙訳(註65)を参照されたい。

³⁰⁷【菩提行】とは「さとりに至るための実践」であり「菩薩行に同じ」である(『佛教語大辞典』1222頁参照)。

³⁰⁸チベット訳には「今ここに」(iha)に当たる訳語はない。

³⁰⁹チベット訳には「力」(bala)に当たる訳語がない。あるいは原文を puṇyabala という複合語とみて、「福德力」と訳すべきか。

³¹⁰【無遮施会】については、上註160を参照されたい。

³¹¹【ピシャーチャ】については、第20巻第4号所載の拙訳(註181)を参照されたい。

森火事に迷い込める鳥の如く³¹²、[菩薩を] 見ては奔走したり。

195. そこにおいて³¹³、母、姉妹、父、息子、また兄弟たちが、
「どこで見たか、どこに行ったか」と尋ね合い、
そのための故に、[彼らは³¹⁴] 互いに口論したり³¹⁵。
「われらは敗北を蒙れり。命を容赦されることあらざるべし」[と]。
196. 不滅なるが如き、豪壮なる、かの、マーラの大軍勢は、
みな逃走し、全軍壊滅して、四散したり。
[彼らは] 七日を過ぎるまで互いに会遇することなかりき。
顔を合わせた時、言わく「汝が生存してあれば、それだけで幸いなり」[と]。
197. かの[菩提] 樹の女神は、その時、悲心を生じて、
水差しを持って、黒闇の親族（悪魔）に[水を] 注ぎかけたり。
444 「速やかに立ち上がって去るがよい。これ以上躊躇することなかれ³¹⁶。
尊者[の言葉]を無視する、その者たちが、かくの如き目に会えり³¹⁷」[と]。
マーラは言えり。
198. わが息子たちの、有益にして親切なる諫言を聞かずして、
極清浄なる衆生（菩薩）に対して罪を犯したるが故に、
苦悩と恐怖と敗北と悲嘆と破滅と、また、
叱責の声と屈辱と落胆とを、われは、今日³¹⁸、蒙れり。
女神は言えり。
199. 実に、罪過なき者に対して罪を犯すところの、
無知なる者は、恐怖³¹⁹と苦悩と敗北と落胆と、
叱責の声と、死罪と禁錮と、
幾多の患難とに遭遇する。
200. 天神・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・羅刹の王、また、
梵天・帝釈・他化自在天・色究竟天³²⁰等は、彼の勝利を宣言したり。
「かくの如きナムチの軍勢は御身によって摧滅されたるが故に、
世間の勇者よ、[御身の] 勝利なり」[と]。
201. [彼らは] 瓔珞・半月宝³²¹・傘蓋・旗幟・幢幡を奉獻し、

³¹² チベット訳は「風に打たれた森火事による鳥の如く」という意味の訳文になっている。

³¹³ チベット訳には「そこにおいて」(tatra) に当たる訳語はない。

³¹⁴ チベット訳には「彼らは」に当たる訳語 (de dag) がある。

³¹⁵ 「口論したり」の部分のチベット訳は「争い口論したり」という意味の訳文になっている。

³¹⁶ 「去るがよい。これ以上躊躇することなかれ」の部分のチベット訳は「躊躇することなく、急ぎ去れ」という意味の訳文になっている。

³¹⁷ チベット訳は「尊者の言葉を聞かざるが故に、かくの如き目に会えり」という意味の訳文になっている。

³¹⁸ チベット訳には「今日」(adya) に当たる訳語はない。

³¹⁹ 「恐怖」(bhaya) に当たるチベット訳は「罪過」(ñes) となっており、梵文と合わない。

³²⁰ 「色究竟天」(akaniṣṭha) とは「色界最上の天。色界に属する四つの天（四禪天）のうちの最上に位置する天」である（『佛敎語大辞典』575頁参照）。

³²¹ 「半月宝」(ardha-candra) とは、『梵和大辞典』によれば「半月形の鏤（やじり）ある矢」であるが、ここでは「三日月型をした装飾品の一種」と思われる（cf. BHSD）。

446

花や沈水香³²²・多伽羅香³²³・梅檀^{せんたん}の香末を雨と降らしめ、
諸^{もろもろ}の楽器を演奏しつつ、歓声を挙げたり。

「敵を征服せる獅子よ、勇者よ、御身は樹下に坐したまえ。³²⁴

202. この最勝の座において、慈心を以て邪悪なるマーラの大軍を打ち破り、
勇猛なる者よ、[御身は] 今日、菩提を得て、
不共なる（仏特有の^{じゅうりき}）十力と、[四] 無礙辯（説法自在能力）と、
あらゆる仏陀^{きょうがい}の境界とを、今こそ証得したまわん」[と]。
203. マーラ（悪魔^{じょうぶく}）の調伏のために、ここに戦闘^{ぼつぼつ}が勃発したる時、
等覺菩薩^{とうがくぼざつ}³²⁵（成仏直前の菩薩）の力と剛勇とを觀見^{かんけん}せるところの、
三十六拘胝と、二十四那由多^{なよた}もの[多くの]者たち、
その者たちは、無上なる仏菩提^{ぶつぼだい}³²⁶を心に発願したり、と[言われる]。

[以上]「降魔品」と名づける第21章なり。

³²²「沈水香」(agaru) は「沈香」とも呼ばれる「最上の香木の一種」である。

³²³「多伽羅香」(tagara) は「タガラと呼ばれる香木から採った香」である。

³²⁴この行は写本に混乱が見られ、文意不明である。チベット訳は「敵衆を征服せる勇者たちが御身を覆い包むべし」という意味の訳文になっている。

³²⁵「等覺菩薩」(sambodhisattva) については、上註252を参照されたい。

³²⁶「仏菩提」(buddha-bodhi) とは「仏の菩提」の意である。「菩提」とは「仏・縁覺・声聞がそれぞれの果において得るさとり智慧」をいい、「この三種の菩提のうち、仏の菩提はこの上ない究極のものであるから阿耨多羅三藐三菩提（あくとらさんみやくさんぼだい）と名づけ、訳して無上正等正覺、無上菩提などという」（法蔵館『総合佛教大辞典』1300頁「菩提」の項目参照）。